



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 北村季吟の源氏学（三）：附・日本大学図書館蔵『源氏物語微意 下』翻刻                                          |
| Author(s)    | 宮川，真弥                                                                       |
| Citation     | 詞林. 2016, 60, p. 19-81                                                      |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/58623">https://doi.org/10.18910/58623</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 北村季吟の源氏学（三）

—附・日本大学図書館蔵『源氏物語微意 下』翻刻—

宮川 真弥

はじめに

前々稿<sup>1</sup>より数稿にわたり、『源氏物語』に関する季吟の著述等について概観し、そのうちのいくらかの翻刻を供し、以て季吟の源氏学の再検討を企図しているところである。

前々稿では、日本大学図書館蔵『古今集并歌書品々御伝受之書』および『源氏物語微意』（以下、『微意』と称する）の基礎的研究を行った。

また、前稿では、『十如是和歌集』『源氏物語忍草』の新出伝本を報告し、『微意』の記述によって『湖月抄』における年立に関する「一説」が季吟説であることの証明を行い、『源氏秘訣』の季吟奥書によって推定される季吟周辺の交流圏についての論述を行った。

本稿では、前稿までの補足を行うとともに、季吟周辺の『源氏物語』関連書について論じることとする。

一 「読覆醬集遊石山寺詩」について

まず、『微意』下巻「源氏物語止観説」の後に記される「読覆醬集遊石山寺詩」について言及したい。題の通り、石川丈山『覆醬集』の「遊石山寺」詩に対しての詩である。韻は上平声六魚韻（廬・魚・書）。以下に本文を掲出し、私に読み下しを附した。

読覆醬集遊石山寺詩

|         |         |          |
|---------|---------|----------|
| 半日幽閑入学廬 | 半日幽閑として | 学廬に入り    |
| 窓前数帙抔衣魚 | 窓前 数帙   | 衣魚を抔ふ    |
| 紫藤言葉国朝宝 | 紫藤の言葉   | 国朝の宝     |
| 那箇人稱浮艶書 | 那箇の人か   | 浮艶の書と称せん |

また、季吟は『疏儀莊記』<sup>5</sup>に以下のように記している。後述する季吟手沢『源氏物語』本文に関わる記述も見られるた

め、やや長文を引用する。

（稿者注…宝永二年（一七〇五）五月の）六とせ七年のいにさきの師走、法印に叙して再昌院となさる、林大学頭、そのゆへの記をかき、詩作りて給へりしを、額のやうにて軒にかけて、即家の名とせり、院内に書棚をまうけて、たなのうへには古今集、桑原三位（菅長義卿）筆、二条家貞応本をかけるに、門人三井氏、東野州の自筆の本を所持せしをかりて、再三校合取捨せり、源氏物語は東光院殿（植通公述作孟津抄貞徳源氏承此説）桐壺の巻を書給ひ、安藝の国一の宮感神院に奉納し給ひしよし奥書有て、三貌院（信基公外題同）・西三条実枝公・飛鳥井雅敦・雅庸など助筆し給ひし本、いともかしこき御めぐみのたまものぞかし、箱のたくみ、蒔絵のさまなど、まことのおほやけの物と見えて、凡ならず俗をはなれたり、折ふし五月雨晴て、文どもの虫ばらひなどする中に、覆醬集石山寺にあそべる口号をみて、

半日幽閑入学廬、窓前数帙抔衣魚、

紫藤言葉国朝宝、那箇人稱浮艶書、

一条禅閣の花鳥餘情のぞにも、我國の至宝は源氏物語に過たるはなかるべしと称美し給へるさうしをや、伊勢物語・百人一首・詠歌大概是飛鳥井一位より其抄をうつしとれり、これなん後水尾院御説の聞書也、万葉集・八代

集より新勅撰・続後撰まで自筆に抄出せり、是等を持ちて、家をたて、一流を立て、わが子孫の此路にこゝろざ、んもの、学びならひなば、いかで兎の裘のはかなき名を残すものあらん、其外、文選・文集、菅家の御点なり、これもやまとうたのたよりとせんに、かたはらさけずしたがひもちて、今はこれらの文をねられぬ夜半の我友ならし、

加えて、架蔵の掛物には、以下のようにある。

読覆醬集遊石山寺詩

半日幽閑入学廬窓前数

帙抔衣魚紫藤言葉国

朝宝那箇是稱浮艶

書

花鳥のあまりある情は更

なり五てうの三品も源氏

みざらん歌よみは無下の

事とかやの給ひし

むらさきの一もとゆへに言の葉の

千くさのいろもそふるとぞきく

法眼季吟（朱丸印・七松）

架蔵の掛物のみ第四句に異同があり、「那箇是称」となっているが、詩意は変わらない。

当該詩の詠作時期については、前々稿に述べた「源氏物語日本紀准拠」「源氏物語止観説」にてをほ少々<sup>7</sup>の追加が、『微意』の奥書によって、『微意』成立に遅れる元禄八年（一六九五）六月六日と推定されることを踏まえると、当該詩をその頃の作と見ることも不可能ではない。しかし、『微意』において当該詩がやや小書きにされていることや、『微意』所載詩の異同が『疏儀莊記』所載詩と一致することを考慮すると、後の書き入れが、元禄十五年（一七〇二）十月の柳沢吉保への伝授の際に一体化したものである可能性も排せない。架蔵の掛物に「法眼」とあることから、ひとまずは当該詩成立の下限を、季吟が法印に叙された元禄十二年（一六九九）十二月十八日以前とするにとどめておきたい。なお、『疏儀莊記』の記述については、法印に叙されて後の詠であるため初詠ではないと考えられる。

当該詩が石川丈山「遊石山寺」詩に應えるものであることは詩題からも明らかであるが、詩意を窺うにとりわけ「遊石山寺」詩の第八句「琅函にも亦た艶書を入るるや不<sup>い</sup>や」に反応したものであることが推察される。これは、例えば『微意』注記37に、

或人間云、人のいましめとするとならばいかでか聖賢のふるまひ節婦の貞操をかきてこそあらめ。あやなき妖艶

不義のわざをかきて好色のなかつたことなす事、如何。

答云、聖賢の詞、貞女のわざは旧記に既に書顕して誰も見聞侍りぬ。今此草子には態好色のかたうとく成て、うへにはそのたよりなるやうにて、下にいましめをふくめてをのづから善にみちびくならし。春秋史記などにもさまざまの不義のわざどもを書伝て勸善懲惡せられし。是亦好色の媒といはば可<sup>ま</sup>ならず。たとへば此物語のさまは異与の言のよく人をよろこばしめて微意をふくめしたくひとしるべし。

とするとき、『源氏物語』が「浮艶書」ならぬとの言明と軌を一にする。それを一言に述べうるからこそ、当該詩を伝授書である『微意』に記し添えたのだと考えたい。

## 二 『微意』の注記の錯簡について

本稿をもって、『微意』の翻刻が出揃うこととなる。それに伴い、本資料の活用我便なるべく、本稿末尾に「『微意』湖月抄」「集成」「増註」「大成」対照表<sup>8</sup>を附した。これは、『微意』と『湖月抄』（板本・影印本・活字本）との比較のために各資料での所在を示し、他の注釈書との比較のために『源氏物語大成』における所在を示したものである。

さて、『微意』に『湖月抄』を参照する記述がしばしば見えて、『湖月抄』を併用する意図があったと思しいことは既に述べた。また、前々稿にも示した「北村季吟書簡・北村正立

宛」<sup>5</sup>には、講談の際には必ず読み聞かせるだけで、写させないようにとの指示があった。しかし、それらのことを踏まえると、『微意』にはいささか不審な現象が見られるのである。

『微意』の注452と注453は、本来の順序とは逆になっており、序列を正すために前後の入れ替えを示す符号が記されている。このように、本来、『源氏物語』全文を有する『湖月抄』などを用いて読み進めた場合、注記の順序の転倒にはすぐに気がつくはずである。何故なら、転倒していた場合、当該本文はそれ以前の箇所が存在するために、いくら読み進めても当該本文を見出せないからである。しかし、対照表にも示したように、注66・67、注92・93、注211・212では、順序が転倒しているにもかかわらず、訂正されておらず、かつまた入れ替えを示す符号もない。

これは『微意』の閲読や講釈の際に、『湖月抄』の参照が逐条では行われていなかったことを示唆する。訂正が行われた注452・453はやや前に「師説湖月抄にくはし」(注450)と『湖月抄』を参照させる注記が存在するが、訂正が施されていない三例はその例にあたらないうことも傍証となろう。

『微意』閲読の際、『湖月抄』を傍には置き、参照が求められる箇所を開きはしても、『微意』の見出し語と対照しながら『源氏物語』を読むことはなく、講釈の際もまた同様であったと考えられる。伝授書の性格上、見出し語から場面が想起できる程度の理解度は求められていたのであろう。

### 三 『源氏物語』伝授に関する資料

季吟の関与する『源氏物語』の伝授に関する資料としては、『微意』の他には『源語秘訣』と切紙とが挙げられる。『源語秘訣』については、前稿で取り上げたため、省略に従う。

現存の切紙として、二通の「源氏物語三箇之大事」の切紙が柳沢文庫蔵『古今集并歌書品々御伝受御書付』<sup>11</sup>に納められている。これらは『微意』が納められる『古今集并歌書品々御伝受之書』と一具とみられる。

このうち、「二、源氏物語三箇之大事」の裏書には、三箇大事の「三つが一つ」について、『源語秘訣』では『春秋左氏伝』を引いているが、家伝ではその義を用いないと記しており、『源語秘訣』を付与された者を対象としていることが明らかである。一方、当該切紙と『微意』とは一具のものとして扱われていると思しいが、その授与時期の先後は詳らかでない。

なお、当該資料の他の切紙としては、彦根城博物館蔵『源氏物語秘訣』<sup>12</sup>があり、三箇大事の外として、桐壺更衣の名が「おたま」であるとの説が記され、証歌として「たづねゆくまほろしもがなつてにてもたまのありかをそこしるべく」（桐壺帝、桐壺巻。傍点は稿者による）が挙げられている。

さて、『源語秘訣』や切紙が用意され、『微意』のような伝授書が作られる一方で、季吟の周辺では『湖月抄』を理解す

る助けとなるべき書も作られていた。それが天理図書館蔵『源氏物語打聞』<sup>13</sup>（以下、『打聞』と称する）である。

『打聞』は、従来、箕形如庵の説を聞書した季吟自筆草稿であり、『湖月抄』に先行するものとされてきた。しかし、実際には季吟の孫の季任の書写にかかり、季吟の影響下で『湖月抄』に施注したものとして推定される。その検討の詳細は旧稿<sup>14</sup>に記したため割愛するが、『湖月抄』が『源氏物語』の注釈書であったように、『打聞』は『湖月抄』の注釈書なのであった。

季吟にとって公刊しうる範囲での達成であった『湖月抄』が、季吟の在世中、既に施注対象となっていたことは、季吟らによる講釈の場において、『湖月抄』がテキストとして、いわば教科書のように用いられていたことを示しているように、はじめからその意図をもって作成されたか否かはさておき、流布本となり、近世期に『源氏物語』理解の基礎となった現象が、既に季吟周辺で現れていたことは非常に興味深い。

以上のことを総合すると、季吟の門弟が『源氏物語』を学ぶにあたっては、『打聞』を用いて板本『湖月抄』を理解し、板本『湖月抄』で理解を深めた後に『源語秘訣』を授与され、さらに進んで切紙や伝授書『微意』で深奥を知るという学習過程が組まれていたと推定されるのである。

#### 四 『源氏物語』の本文

季吟と関わりのある『源氏物語』本文についても言及しておきたい。

先掲の『疏儀莊記』の記述によれば、九条植通が桐壺巻を書写し、厳島神社（安藝の国一の宮）の感神院に奉納したとの奥書を有し、近衛信尹・三条西実枝・飛鳥井雅敦・飛鳥井雅庸などが分担筆写した『源氏物語』を晩年の季吟は所有していたという。しかし、稿者は当該資料を確認できていない。博雅の御示教を請う。

ただ、同じく季吟晩年の自筆本『源氏物語』が細川家北岡文庫に蔵されていることは確認している。以下、解説目録から引用する。

##### 5. 源氏物語 列帖装写本五四帖 赤二〇四・三七

北村季吟（一六二四～一七〇五）筆。季吟は源氏物語の注釈書『湖月抄』を著す。当本は、元禄七年（一六九四）、七一歳の折りに書写したもの。奥書に、江上向南亭における書写と記される。季吟と実子湖春は、元禄二年（一六八九）に幕府に召し抱えられ、翌三年、神田鷹匠町（小川町）に邸を賜り、近水亭、向南亭と称した。従って、その向南亭で書写したものであろう。公家様を意識したのか枳形に仕立てられる。なお、最終「夢浮橋」の帖は、一行毎に、金、銀、朱（二種）、藍、墨、緑の七色を使

い分けて交ぜ書きされる。<sup>17)</sup>

なお、奥書に「北村／氏」の方印が捺されている。

北岡文庫本の本文は『湖月抄』の本文に極めて近い。『湖月抄』の本文については、清水婦久子氏が、

『湖月抄』の本文校訂は、（稿者注）『絵入源氏物語』（慶安本を底本とし、『万水一露』や『首書源氏物語』と各種注釈書を参照しつつ行われたと考えられる。青表紙本系統あるいは河内本系統の由緒正しい写本や別の版本を底本にしたと考えるべき理由は見当たらない。<sup>18)</sup>

と明らかにされた。『湖月抄』が「慶安本と異なる数少ない例」<sup>19)</sup>として、清水氏が掲出された末摘花巻の例のそれぞれにおいて、北岡文庫本は『湖月抄』と一致する。また、『絵入源氏物語』慶安本や『湖月抄』の独自異文と見られる箇所においても、同様である。一例を挙げると、葵巻の「あやしき山かつさへみたてまつらんとすなれ。とをきくにくにより」（『源氏物語大成』二八六頁三・四行目）の傍線部は「すれは」となっており、北岡文庫本は『湖月抄』と同様の形をとる。更に、本文に傍記される異本注記も『湖月抄』に一致する。なお、漢字の宛て方や仮名遣いには異なる点がある。詳細な検討は別稿に譲るが、北岡文庫本は『湖月抄』を写したか、季吟の手元にある『湖月抄』との共通祖本を元に作成された<sup>21)</sup>と見て良いだろう。すなわち、季吟は『湖月抄』の本文を、晩年まで自家の証本と見ていたということになる。注釈に

おいては、板本と伝授書等で公開の範囲を峻別する一方、本文については良質な本文を板本として提供する意思があったと考えられる。

このことは季吟の板本観を考える上で示唆に富む事例である。関連して、『湖月抄』での引用文献について述べたい。

『湖月抄』に「細」との肩付で引用される注記は、実際には「明星抄」からの引用であることを三浦尚子氏が明らかにしている。<sup>22)</sup>ここでさらに、その引用が板本「明星抄」によるものであることを指摘する。

以下は、『湖月抄』総角巻、「ひろばかり」の頭注である。

ひろばかり（細）催馬楽のかよりあひけりの心にて書り。  
中君あやしくおもひ給ふへきと也。（朱）一尋の心也。（並）  
尋斗とはけちかくてといふ心なるへし。催馬楽にて書  
之云云。<sup>23)</sup>（18丁表）

傍線部「朱」の肩付は、板本『明星抄』を用いていることの証左である。板本「明星抄」を引用しよう。

ひろばかり 催馬楽のかよりあひけりの心にて書り。中  
君あやしく思給へきと也。（朱）一尋の心也。ひろばか  
り 尋計。<sup>24)</sup>（総角巻、8丁表）

板本「明星抄」には、底本で朱書きであったことを示すと考えられる「朱」の肩付がしばしば見られる。『湖月抄』の該当箇所では、板本「明星抄」の「朱」の肩付をそのまま引用しているのである。この「朱」の肩付は『湖月抄』におい



て、この箇所ともう一箇所<sup>(25)</sup>に見えるのみであり、不要な肩付を消し損じた名残と考えられる。

『湖月抄』「凡例」で、季吟の源氏学の師・箕形如庵について、

此如庵老人はもと称名院殿、三光院殿より相つたへて、八条の宮の御前にても講ぜち申され侍しとかや。其故に  
此講尺には細流を以てもと、せられ侍し。

と述べる通り、『細流抄』は季吟の源氏学においても根本的な資料である。

また、『湖月抄』において、『細流抄』を示す「細」の肩付の他に、『明星抄』を示す「明」の肩付が複数存在し、かつ「細」「明」の肩付が併記される例もあることから、『明星抄』と区別して『細流抄』の説を引用しうる資料を季吟が所持していたことが推定される。そのような状況にもかかわらず、季吟が実際に使用したのは板本『明星抄』なのであった。

先述の通り、『湖月抄』の主底本は板本『絵入源氏物語』慶安本であった。『春曙抄』の主底本は、鈴木知太郎氏が指摘するように、『磐斎抄』との共同原拠本が想定されるが、その共同原拠本は慶安板本を主底本としている。板本『明星抄』の利用を踏まえるに、これらの事象は、板本が書き入れに便利であるということを超えて、板行された古典本文に対する季吟の信頼を表しているものと考えられる。『湖月抄』においても、信頼しうる古典本文を提供しようとする季吟の

意図を読み取ることができよう。そのことは北岡文庫本『源氏物語』や『打聞』の存在が示唆するところである。

終わりに

本稿では、季吟「読覆書集遊石山寺詩」についての考察、『微意』の注記の錯簡の分析、季吟周辺での『源氏物語』伝授資料および季吟手沢『源氏物語』本文の報告、季吟の板本観の検討を行った。

本稿までの三稿で、『微意』を中心に、季吟周辺の『源氏物語』関連書について、様々な観点から報告した。

管見に入った季吟周辺の『源氏物語』関連資料については、注を含めて総て触れたが、なお遺漏の多きを懼れる。博雅の御教示を請うとともに、今後とも資料の博搜に努めたい。

注

(1) 拙稿「北村季吟の源氏学（一）」——附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 上』翻刻——（『詞林』第57号、平27・4、<http://doi.org/10.18910/54508>）。以下、本稿における「前々稿」は同稿を指す。

なお、前々稿に以下の誤りがあった。お詫びして訂正する。66頁上段16行目、誤・國中問道、正・閨中問道。

また、51頁上段12行目で、「黒田直邦は古今伝授を受けた後の元禄十五年の「和歌の会」で初めて参会しており、これもまた古今伝授と無縁ではあるまい」と記したが、元禄十四年九月十三日



の歌会にも出座しており、正しくはこれが初めての参会となる。ただし、黒田直邦が元禄十四年九月五日に古今伝授を受けたことと、直邦が柳沢吉保の歌会へ参会することとの関わりを述べる論旨に変わりはない。

(2) 平成二十八年の日本大学における改組によって、日本大学総合学術情報センター蔵から日本大学図書館蔵へと所在の名称が変更された。

(3) 拙稿「北村季吟の源氏学 (二) —— 附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 中』翻刻——」(『詞林』第58号、平27・10、<http://doi.org/10.18910/5448>)。以下、本稿における「前稿」は同稿を指す。

なお、前稿に以下の誤りがあった。お詫びして訂正する。60頁上段19行目、誤：国中、正：閨中。65頁下段8行目、誤：国中、正：閨中。66頁下段2行目、正しくは一字下げ。

(4) 参考石川丈山「遊石山寺」詩を掲出する。私に読み下しを附した。韻は下平声十一尤韻(舟・秋・流・幽・不)。

遊石山寺

石山寺に遊ぶ

僧房門外繫扁舟

僧房門外に扁舟を繫ぐ

高蹈翠嵐黄葉秋

高く蹈む翠嵐 黄葉の秋

一片山雲將雨去

一片の山雲 雨を將る去り

千尋湖水鑿崖流

千尋の湖水 崖を鑿つて流る

飛樓疊磴真仙館

飛樓疊磴 真の仙館

奇石怪岩皆鬼幽

奇石怪岩 皆な鬼幽たり

紫氏揮毫記源氏

紫氏 毫を揮ひて源氏を記す

琅函亦入艷書不

琅函にも亦た艷書を入るや不や

引用は富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集日本漢詩 第一巻』

(汲古書院、昭62・2・9頁)による。同書の底本は内閣文庫蔵寛文十一年刊本、請求記号：205-0122。

(5) 引用は大田南畝『続三十輻』(『三十輻 第二』(図書刊行会、大6・5)による。同書の底本は国立国会図書館蔵『三十輻』請求記号：辰一四四。<http://doi.org/10.11501/2554010>。『続三十輻』卷九(通巻二四卷)。。但し、津村正恭『片玉集』(宮内庁書陵部蔵。函架番号：四五八・一。実物は未見、国文学研究資料館のマイクロフィルム(マイクロ請求記号：205-1-273)による)により、一部改めた。

(6) 架蔵、野洲市歴史民俗博物館に寄託。整理番号：向一。紙本。本紙、縦三一・〇糎×横五三・二糎。表装、縦一一七・九糎×横五五・〇糎。軸、横五九・四糎。

(7) 注記215・225・230・444・450・462・464・465が『湖月抄』の注記の参照を求めるものである。また、注記181・182・197が年立に関して、注記492は夢浮橋の巻名について、それぞれ『湖月抄』を参照させるものである。注記243では『湖月抄』の説に言及している。注記457は引用元を明示しての『湖月抄』からの部分引用である。なお、注記120では『湖月抄』の注記が引用され、「在湖月抄」と記されるが、全文を引いているため、『湖月抄』を参照する必要がない。

(8) 早稲田大学図書館蔵。請求記号：チ0603890 0029 0002。

(9) 吉保へ「微意」を伝授するまでに、誰に対しても「微意」の講釈が実施されていなかった可能性もある。その場合は、講釈の場の様相は想定しえない。

(10) また、拙稿「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」(『語文』(大阪大学)第104輯、平27・6)でも詳述した。

(11) 所蔵番号：〇一一一四。原本閲覧停止中のため、実物は未見。

- 宮川葉子『柳澤家の古典学（下）——文芸の諸相と環境——』青簡舎、平24・2に翻刻・解題が備わる。以下、切紙の呼称は宮川氏に従う。また、国文学研究資料館がマイクロフィルム（マイクロ請求記号：36018E）を所蔵している。
- (12) 掛物。実物は未見、野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館 編『野洲市誕生記念企画展図録 北村季吟——没後三〇〇年記念展——』（平17・4、19頁）の影印による。
- (13) 天理大学附属天理図書館蔵。整理番号：11336イ5。
- (14) 拙稿「天理図書館蔵『源氏物語打開』の再検討——北村季吟とその後裔の古典学をめぐる——」（『近世文藝』、第104号、平28・7）。
- (15) 公益財団法人永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託。登録番号：赤二〇四・三七。実物は未見、国文学研究資料館のマイクロフィルム（マイクロ請求記号：224391）による。
- (16) なお、「向南」の号は『万葉集』161番歌の初句「向南山」を「きたやまに（の）」とすることに因み、「北」を意味するものであるう。
- (17) 森正人・徳岡涼編著『第25回熊本大学附属図書館貴重資料展 解説目録 源氏物語千年の時』（熊本大学附属図書館、平20・10、<http://hdl.handle.net/2298/25744>）。夢浮橋巻の一葉が掲載される。
- (18) 清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、平15・3）、255頁。なお、清水氏は同書で『湖月抄』において、「頭注や傍注の「抄」は『岷江入楚』の注とほとんど異なる所はない」（257頁）と指摘している。
- (19) 注（18）掲出書、251頁。
- (20) 池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』（中央公論社、昭28・6、29・2）。なお、『源氏物語』の校異については同書の他、加藤洋介「河内本源氏物語校異集成」（風間書院、平13・2）、および加藤氏のウェブページに掲載される「源氏物語校異集成（稿）」を用いて確認した。
- (21) なお、野村貴次氏が『北村季吟古注釈集成解説 季吟本への道のり』（新典社、昭58・3、北村季吟古注釈集成別1。608頁）で指摘された、葵巻において、早印本での本文の脱落を、後印本で埋木修正している箇所は、北岡文庫本では後印本と本文となっている。
- (22) 三浦尚子「源氏物語湖月抄」所引「細流抄」に関する一考察」（『語文研究』（九州大学、92号、平13・12）。
- (23) 『湖月抄』の引用に際しては、『源氏物語湖月抄』（新典社、昭52・7、53・7、北村季吟古注釈集成7、17）を用いた。同書の底本は早印本ではあるが、一部に野村氏の操作が加わるため、他の伝本も適宜参照し、異同のないことを確認している。以下、同様である。
- (24) 『明星抄』の引用は、中野幸一編『源氏物語資料影印集成8 明星抄十六—二十』（早稲田大学出版部、平2・7）による。同書の底本は早稲田大学図書館蔵『明星抄』（請求記号：文庫38A0092、無刊記）。
- (25) 若紫巻5丁表、「かのくにのさきのかみ」の傍注「明」播磨の前の守也（朱）明石の入道の事也である。なお、夕顔巻6丁表、「しそくとして」の頭注には「紙燭也紙束とも云（明星）さきにこの扇はやがて御覧すへきを、さあれば、此乳母を問給ふ事の態ならぬやうなれば先さし置て此とふらひよくし給ひて、帰給

とて見給心つかひ殊勝也（明）物語なとし給うちに日もくれにければなり」とある。「明」の肩付以前は『細流抄』も有する一方、「明」の肩付以降は板本『明星抄』で「朱」と示される箇所であり、注記生成や肩付の付与・修正の過程が窺えて興味深い。

（26）なお、季吟は『湖月抄』『発端』の「此物語諸抄」において、『細流抄』を三条西公条（称名院）、『明星抄』を三条西実澄（三光院）の作と記している。また、『明星抄』については、「（師説）細流に発端一冊を加へて所々に小補あり」と記す。

（27）鈴木知太郎「枕草子諸版本の本文の成立——特に慶安版本、盤齋抄、春曙抄、旁註本について——」（『文学』3巻2号、昭和10・2）。

※引用に際して、割書・小書・肩付は◇で、改行は／で示した。字体は通行のものに改め、濁点や句読点を適宜附した。『源氏物語微意』の注記は翻刻の通し番号で所在を示した。

日本大学図書館蔵『源氏物語微意 下』翻刻

【凡例】

一、底本には日本大学図書館蔵、北村季吟『源氏物語微意 下』（請求記号：911.104/K168/19）を用いた。

一、底本の翻刻に際しては、可能な限り原文のままとすることを原則とし、改行・清濁・誤字・脱字などに操作を加えることはしていない。ただし、字体は適宜通行のものに改め、合字は開き「□」で示し、意の通じない箇所や誤解を与えかねない箇所等には「（ママ）」と傍記した。表示できない漢字については、「※「X+Y」と記し、構成要素を示した。

一、丁移りの際には、行末に「┘X丁オ（もしくはウ）」と、丁数と丁の表裏を示した。

一、『源氏物語』の巻名が記される箇所には、行頭に丸括弧囲み数字で巻次を示した。巻名が注記同様、一字下げで記されており、注記に紛れ易いための処置である。なお、若菜巻は上下に分かたれ、雲隠巻も注記を有するため、巻次は55までとなる。また、注記ごとに通し番号を付し、行頭に示した。これらの番号は上・中・下巻を通して用いる。

一、その他、備考を「○」で示した。

【翻刻】

（遊紙1丁）

(37) 横笛巻

335 やまの帝は二宮もかく人わらはれなるやうにて詠給ふなり入道の宮

も此よの人めかしきかたはかけはなれ

朱雀院かくさまくの御歎き

あるは悪後の光君のためさかな

くおはしけるむくひを書にや

梅壺の久しき御心さしのむな

しかりしなとも其心なるへし

336 あまたつとへ給へる中にも此宮

こそはかたほなる思ひまします

万事十分にと、なふ事はなき

世の習ひを思ひあはすへし易の亢

龍の悔ある理り誠なるにや

337 さうのことをいとほのかにかきならし

給へるもおくふかき声なかにいと

と心とまりはて、

夕霧もとより懸想の心有しに

此箏の音にいと、心とまり給ふ也

┘1丁オ

┘1丁ウ

すへて女はわか夫ならぬ外の男に  
対して情しりかほつくり風流の  
わさなともていつましき物なるへし

此女二宮柏木の、ちに二夫に見

えしの心つよくましまさは夕霧

にかくみやひかはし給はてこそ

あるへけれ尤人の教を書る物也

338 た、末つかたをいさ、か引給ふ  
想夫憐にはことにさしいらへ

あるましきわさなるを此次に

光君のやかて夕霧にも御異見

ありしは此宮にた、ならしと

思ひやり給へる故也恥かしきさま也

339 かの今はのとちめに一念のうらめしき  
にももしは哀とも思ふにまつはれ

てこそは長きよのやみにまとふわさなれ

臨終の一念に生所定るといへ

りと細流にも註せり又人の教也

340 三宮こそいとさかなくおはすれ常  
にこのかみにきをひ申給ふといさめ聞え

三宮は後に匂兵部卿と申て帝

后とりわきおほしめしたるみこ也

をしたちあやくなる本性に

「 2 丁オ

「 2 丁ウ

「 3 丁オ

て人の煩ひなるへき事をもかへり

み給はす手習の君に對してわり

なき有さま薫にうしろめたき

しわさとも有ける其御心はへ

をかねてみせたる物なるへし

341 女は猶人の心うつるはかりのゆへよし  
をもおほろけにてはもらすましう

こそ有けれとおもひしらる、こと

ともこそおほかれ

光君好色に練し給へる御心に

おもひしらる、事有しと也

まことに人のいましめなるへし

342 おなしうは心きよくてとかくか、つらひ  
ゆかしけなきみたれなからんやたか

ためも心に、めやすかるへき

夕霧のた、ならしとをしはか

り給ひて自他の名た、ぬやう

にとの御異見のさま也是亦万

の人の心つかひを示す詞なるへし

343 さかし人のうへの御をしへはかり心つ  
よけにてか、るすきはいてやと

光君色このみにおはして夕

霧をいさめ給へるゆへ此心の夕霧

「 3 丁ウ

「 4 丁オ

「 4 丁ウ

にあるさま也子を教むとならば  
父の身をおさめて庭訓をもな

すへきいましめなるへし大学曰

其所<sup>レ</sup>令<sup>スル</sup>反<sup>ニ</sup>其所<sup>ニ</sup>好<sup>シ</sup>而民不<sup>レ</sup>從<sup>ハ</sup>是<sup>コ</sup>

故<sup>ニ</sup>君子<sup>ハ</sup>有<sup>ニ</sup>諸<sup>レ</sup>己<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>后<sup>ム</sup>求<sup>ニ</sup>諸<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>

無<sup>ニ</sup>諸<sup>レ</sup>己<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>后<sup>ム</sup>非<sup>ニ</sup>諸<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>藏<sup>ハ</sup>乎<sup>ヲ</sup>

身<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>恕<sup>ハ</sup>而能<sup>ハ</sup>喻<sup>ニ</sup>諸<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>未<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>

有<sup>ニ</sup>一也<sup>ハ</sup>といへり民をおさむるも子

を教るものをのれに善有て人の

善をせめをのれに悪なうして

人の悪をも正すへき也

344 うちいて聞えてけるをいかにおほ

すにかとつゝましうおほしけるとそ

おやに対して其御心にさはるへき

はゝかりあらん事はかるゝしく

いひいつましきをしへなるへし

(38) 鈴虫巻

345 火とりともあまたしてけふたきま

てあふきちらせはさしより給ひて

空にたくはいつくの煙ぞと思ひわ

かれぬこそよけれ

空焼のやうを教給ふ也と細

流にも註せり女三宮の御方

「 6 丁オ

「 5 丁ウ

の女房物ふかゝらぬわか人ともなる  
ゆへよろつのようないを教給ふ由也

346 心ならぬ人すこしもましりぬれば

かたへの人くるしうあはゝしくしき聞え

いてくるわさなりけり

女心のあさはかなるかはしめは

人まねに尼をねかへと堅固に

とをるはまれ也あまたの中に

さやうの心定らぬ人一人もあれ

はかたはらの人をもみたして果

は名をたつる事出来ると也

尼にかきらす出家のうへすへて

よろつのをしへなるへし

(39) 夕霧巻

347 まめ人の名をとりてさかしかり給ふ

大將此一条の宮の御有さまを猶あ

らまほしと 是此物語の筆

誅の詞也実法の名を取て柏木

の上などをもときし人なるを

さかしかり給ふと云也孟津抄云人

若き時はたしなめとも後には

さもなき也よく嗜めとの教也

348 うたてもあるかなと宮はおほせと

「 7 丁オ

「 6 丁ウ

ことさらめきてかるらかにあなた  
にはひわたり給はんもさまあしきこ、  
ちしてたゝをとおはしますに  
うたて覚えなから只音せて

「 7 丁ウ

おはしますは油断なるへしかく  
あやうき所はすみやかに立さり  
給ふへき教をかく也すへて女の在所  
は心あるへきか宇治の大君のかへの  
中のきりくすもぬけの空蟬など  
の心つかひをおもふへし

「 8 丁オ

349 よそにきくあたりにたにあらす大  
とのなどの聞おもひ給はんことよ

女二宮の憚りおほしめすへき事  
ともをかきてかくいつかたにもよ  
からぬ中にあるましきしわざなれ  
は女かたにも油断あるへき事なら  
す夕霧も遠慮あるへきこと

「 8 丁ウ

350 との心に此さまくのは、かりを女  
二宮のおほしめす心の上にて書也  
かく何かしか心をいたしてつかふまつる  
御す法にしるしなきやうはあらん  
律師の高言也此詞に慢心あり  
終に靈氣を降伏せざらんこと

をふくめたる書さま也

351 すくくしき律師にてゆくりもな  
くそよやこの大將は  
ゆくりもなくは不意とかく遠  
慮なきさま也此事をかるくし  
くいひ出て終に御息所を驚し  
煩ひをおこして靈氣其よはめ  
にとりよる便りをえたりすへて  
病者のあたりに物いはんに  
病人の心にさはらん事をかるく  
しくいふましきよしのをしへなるへし  
ありしやうをはしめより委う聞ゆ  
小少将か遠慮なきさま也是亦  
病者の心にさはらん事は心しつ  
へきいましめ也はたして何にありの  
まゝに聞えつらんと後悔せし有  
さま是も筆誅して戒むる詞也

「 9 丁オ

353 律師もさはきたち給て

はしめの高言過言面目なからん  
有さま又驗者のみならずよろつ  
道の人にも兼て可思之戒なるへし  
354 さまくおほしいつるにやかてたえ人  
給ひぬ 女二宮さまく不幸におは

「 10 丁オ



しますさま也朱雀院の姫君二  
かたなからかく色々にさま悪く

おはしますさま心あるへし前<sup>ニ</sup>註ス

又細流云此物語かく駿方にも

成就不成就をよくかけり悉皆

世間のありさま也

355 さかしたつ人のをのかうへしらぬやう

におほえ侍れ 柏木巻にさかし人

の上の御をしへはかり心つよけにて

かゝるすき心はいてやと夕きりの

思ひ給ひし首尾なるへし

356 此なめけさを見しきかしとおほしけ

れはおほとのかたゝかへむとて渡り

給ふ 是雲ゐの雁のおもくし

らぬしわさ後悔の基なる事

を書て世の女のたけくしく

男の家を出ありくましきいましめ

をいふなるへし

357 よしかくいひそめつとならは何かはおれ

てふとしも帰り給ふ

是亦致仕のおとゝの本性にて

式部卿宮の物のけの北の方を

迎へ給へるかるくしさと事は

「10 丁ウ

「11 丁オ

「11 丁ウ

かはれとも其あとは同し事に

成ゆく物なりよろしくはからひ

こしらへて早く男のもとへ返し給

へかりし物を女の男にとつくに

帰の字をかけり公羊伝註曰婦人

嫁<sup>シ</sup>以<sup>レ</sup>夫<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>家故<sup>ニ</sup>謂<sup>レ</sup>嫁<sup>ヲ</sup>曰<sup>レ</sup>婦トとあり

これらの道理にても男のさらぬ

かきりは男の家を出ましき物也

358 おほとのかゝるまゝにおほ

しななくことしけし

雲井の雁也是案のことく後

悔し給ふさま也尤女のいましめ

なるへし男の心一向にかはりはて

て我をさりはてはせんかたなし

さもあらぬに疾妬<sup>イブ</sup>を忍ひかたき

はかりに三従の礼義をそこな

ひてみづからおとこのもとを出

婦るは大なるひか事也心を付侍へし

359 紫の上いたうわつらひ給ひし御心ち

(40) 御法巻

の、ちいとあつしくなり給て

若菜の下巻にて御もの、けに

わつらひ給ての、ち也此巻にてう

「12 丁オ

「12 丁ウ

「13 丁オ

せ給ふ事をかゝんとて也世の盛者  
必衰会者定離の断（マツ）を示す也  
360 法花経千部いそきて供養し給ふ

急きてといふ詞哀也うせ給はんの  
心かまへに急き給ふ也出家の御い  
とまをゆるされぬを我身の罪障  
ふかき故にやとおもひとり給ふ  
ゆへに此法事をいそぎ給ふなり  
361 心ほそきすちは後の聞えも心にく  
れたるわさにや

明石上例のかとある遠慮也  
病者なとへ贈答せん心つかひ  
尤かくあるへきをしへ也哥も此  
よにねかふ法そはるけきとは紫  
上の菩提のためにし給ふを明  
石上は祈禱の心に取なして読る也  
362 やかて此つゐてにふたんの読経せん  
ほうなとたゆみなくたふとき  
ことゝもをせさせ給ふ

紫上菩提を忘れ給はぬ心つか  
ひなり人々たれもかくあるへし  
との教にかく也尋常の女は愚  
痴にてかへりていまゝしと思て

「 13 丁ウ

「 14 丁オ

「 14 丁ウ

仏事なとかねてはせざる物なれば也  
363 かきりもなくらうたけにおかしけ  
なる御さまにていとかりそめに世  
をおもひ給へるけしきなる物なく

紫上を此物語の中の第一にかける  
に容儀心はせ相具して今臨終の  
折にもやつれ給へるかたちなから有し  
よりけに似る物なしといへり其上此世  
の栄花にほこり万事心にたらひ給ふ  
身には命も一入おしかるへきに生  
者必滅の理をよく弁へて聊も輪  
廻なき有さまなへてかくあるへき  
教にかくなるへし

364 いふかひなくなりにけるほとゝいひ  
なからいとなめけに侍りやとて  
御几帳ひきよせてふし給へる

紫上終焉に猶礼儀を忘れ給は  
て中宮に敬有て御几帳隔てゝ  
ふし給へるいけるかきり貞節有  
礼儀あり男女老少かくあらま  
ほしき有さま彼曾子の席を

かへつるためしと思ひよそふへし  
365 御色はいと白くひかるやうにて

「 15 丁オ

「 15 丁ウ

「 16 丁オ

紫上生てのかたちはさら也臨終  
死後までをつくせる書さま也

大論云臨終之時色黒者墮

地獄赤白端正者行天上等

366 しにいる玉しるのやかてこの御からに  
とまらんと

前に夕霧のしみてしほりあけて

見奉る所にまことに心まとひ

もしぬへしとありし首尾也

367 世中にさいはいありめてたき人もあい  
なうおほかたのよにそねまれ

わか寵愛せらるゝにほこりて人を

ないかしろにするゆへ人には妬まるゝ

に紫上さやうにはあらさりし也

是は人に対して御心よかりしさま也

368 よきにつけても心のかきりをこ  
りて わか富貴にほこりて物の

ついえをかへりみす人の煩ひをも

いとほぬゆへ人のくるしみとなるを紫

上はさまなかりし也是は家事に

つゝしみ有し心はへをほむる詞也女

も男も尤見習ふへきへき有さま也

(41) 幻巻

「 16 丁ウ

「 17 丁オ

「 17 丁ウ

369 紫上生前死後善つくし美つくし

たるを光君の恋慕給ふ有さま

をかける巻也歳始より除夜に

至るまで四の時々に付て哀悼の

御心はへをさまくかけり夕顔上

葵上薄雲女院等の御愁傷に

文法をかへて一入の哀を尽せり

370 大将の君はやかて御とのゐに侍ひ給

夕霧の孝あるさま也高官高位

の人は身のおもくしきにつきて

かやうの愁傷の折節の孝養の

上も大やうなる事おほし今大

将学問のしるし有て御おは大宮

の御事をはしめ父君につかう

まつり給ふさまも人にことなる由

を書いて世人のいましめなるへし

371 ゆくすゑななきことをこひねかふ

仏名は歳末なれば罪障さんけの

うへに導師千秋万歳の祈念を

なす也然ともことし明なは入道

遁世の御心さし有ければ此世の

祈念を仏の間給はん事片腹

いたしとおほす也此次の雲隠の

「 18 丁オ

「 18 丁ウ

卷は名はかりにて其詞はなけ  
れと嵯峨院に通世の御事末

「 19 丁オ

372 其日そいてたまへる御かたちむか  
しのひかりにも又おほくそひて

年始にも御心ちなやましきさ

まにもてなしてみすのうちにのみ  
おはしまし御弟兵部卿宮はかりに

御対面あり其外は対面し給ふこ

とおさくなき由前に有然とも

「 19 丁ウ

ことし暮て春明なは通世の御

心に是をかきりの御形をみえ給は

むとにや仏名の結願の日出まみ

え給ふさま也一入哀ふかきにや

373 物思ふと過る月日もしらぬまに年

も我世もけふやつきぬる

是としあけは世をのかれ入道

し給はん心有てわかよもけふやつ

きぬるとよみ給ふさま也世上の無

常変改の有さま盛者必衰

の有さまをくり返し示す物也

「 20 丁オ

376 ひかりかくれ給ひにしものち

花鳥餘情云光君さかの院に隠

居し給ひて二三年の、ち終に

昇遐し給ひしことをいへり私案

此発端より以下此卷の有さま

雲隠卷といふ巻はあるへくも

あらず只此巻より書出たる物と

「 21 丁ウ

紫式部文法の奇妙此巻をか、  
さるにあり其よし諸抄に在て湖  
月抄ニ委然るに後人此巻を補ひ  
て桜入巢守八橋刺櫛さかの、  
上下なといふ巻々かける由なから  
をそらくは狼藉マヤ奇怪なる物な  
るへし一向取用ゆへからす

「 20 丁ウ

375(43) 此巻より薫の歳をもて年紀  
をたつるに幻巻にては五歳な  
りし雲隠卷のほとに九年こも  
りて此巻にて十四歳元腹腹のこ  
とあり六歳より十三歳の事は  
雲隠の中に在と知へしさて十四  
歳より廿歳の春までの事この  
匂宮のまきにみゆ

「 21 丁オ

374(42) 雲隠卷  
此巻名はかりにて其巻はなし

みえたり心をつけて吟味すべし

377 なを心安き故郷に住よくし給ふ也けり  
此詞のちに二条院に中君ををき

「 22 丁オ

給ふ事をかくへき微意なるへし

378 わか御心よりをこらさんことなどは  
すさましくもおほしぬへき御けしきな

めり 是亦中君のことなとかくへ

き微意とみゆ

379 た、ひとりの御末のためなりけりと  
みえて明石の御かたはあまたの宮

達の御うしろみをしつゝあつかひ

「 22 丁ウ

源氏の御身のすまあかしにおはし

なとせしもみな入道の祈願にて

住吉に宿願の故のよし前にみえ

たり其首尾の詞なるへし仏神

の信心利益深きことほりを云也

380 ほの開給ひしことの折々いふかしう  
薫の実父は柏木なるよし内々人

の申きかせしことあるなるへし

かほるの宇治にて弁にあひてと

はすかたり開給ふ事を書へき微意

也且又薫に一生道心有しも此故

としらせんかきさま也

「 23 丁オ

381 すこしなよひやはらき過てすきたる  
かたにひかれ給へり

匂宮の本性をかき出たり始中終

好色の人におはしけり

におもひすましたる心なれば

382 中将は世中をふかくあちなき物  
薫の本性をかけり柏木の後世

をすくはん心有て道心有しさま也

をのく御かたの人なとはうるはしうも

あらぬ心はへうちましりなまくねく

しき事もいてくる時々あれと北方

いとはれくしう今めきたる人にて

つみなくとりなしわか御かたさまに

くるしかるへきことをもなたらかに

聞なし思ひなをし給へはめやすかり

けり 継子 種かはりの姉妹

の御中なれば御めのと女房な

とのくねくしく心よからぬ事など

あれとまゝ母の北方をとなしき

「 24 丁ウ

「 24 丁ウ

「 24 丁ウ

人にてなたらかにことなくし  
なし給ふと也細流にも此所を  
ひとの教をかけるよしあり世  
の継母のさかなきにいましめたる

詞なるへし女中にかきらす男の

中にも此わかかたさまに苦し

かるへき事をもなたらかにき、

なし思ひなをし給ふといふ所を

心をつけて見ならひ侍るへし

385 八のみやの姫君にも御心さし浅からて

宇治の中のきみの事也宇治十

帖をかゝむ微意なるへしこゝもと

は椎かもとの巻にあたれり

(45) 竹河巻

386 故との、情すこしをくれむら／＼しき

過給へりける御本性にて心をかれ

給ふ事も有けるゆかりにや誰に

もえなつかしう聞えかよひ給はす

わか世に陰徳をつみをけは子

孫にいたりて陽報ある習ひ

をしらしむる詞也千金万巻を子

孫にのこさんも陰徳を冥々の

中につまんにはしかさるよし司馬

「 25 丁オ

温公の家訓にあり彼于公か門

を高くし魏顆のために草を

結ひし老人のためしを思ふへし

かりにも人に情なくあたる事

あらんは子孫のためあしきたく

ひよにおほきいましめなるへし

387 みつからのいと口おしきすくせにて思ひ

の外に心つきなしとおほされにしかは

玉かつらのわかゝりしよに冷泉院

の御位の時宮仕へし給ふへかりしを

ひけくろにすくせ有て本意たかへ

給ひし残念忘れかたくし給ふ心也

終に此心にて此姫君を藏人少将に

あはせすして院参せしめまいら

せてさま／＼後悔の事などあり

今終に事ひきいて給ひてん

など世のあさけりに逢給ひし

也わか私をさしをきてよによろしき

ほとをはからふへきをしへを書り

388 は、北方の御文もしは／＼奉り給ふいと

かろひたるほとに侍れとおほしゆるす

かたもやとなんおとゝも聞え給けり

藏人少将の母北方は致仕のおとゝの

「 25 丁ウ

「 27 丁オ

「 26 丁オ

「 27 丁ウ

389

御むすめ雲ゐの雁玉かつらの実の  
御いもうと也おとゝとは夕霧也  
いつれものかれぬ方にてかく詞を  
くはへ給ふにはゆるし給ふへき事  
にや又少将官位こそ浅からめ其  
人からもめやすく行さき頼もし  
き人なるをやされと冷泉院へ心  
さし有て終<sup>マデ</sup>ゆるし給はさりしか末  
よろしからざる由を書いて教とす  
そもく女一宮の女御はゆるし給ふや  
夕霧の此詞少将に此姫君をゆ

るし給はぬは物しおほしなから  
其色をみせ申給ふへきならねは  
只おとなしやかに大筋目はかりを  
の給ひて猶は、かりあるへきよし  
をほのめかし給ふ有さま也院の御  
事をの給ふにもさかり過たる心ち  
すれと、いひよろしう生いつる  
女子侍らましかはと思給へよりなから  
はつかしけなる御中にましらふ  
物の侍らてなんなどの給ふもこの  
はつかしけなる御中とは秋好中宮  
こきてんの女御等のおはします事

「 28 丁オ

「 28 丁ウ

「 29 丁オ

390

也是も玉かつらの姫君を今はかは  
かしき御後見もなき御有さまに  
ては無用なるへき心をこめての給ふ  
さま也わか御子の少将にゆるされ  
ぬゆへ妨けさまにはの給ひにくけ  
れは大やうにふくめての給ふ心也  
いさやはしめよりやむことなき人の  
かたはらもなきやうにて

玉かつらの御まゝ子左近中将右  
中弁なども御むすめを院へまい  
らせ給ふをあやしき事に思ひ  
の給へと玉かつら同心し給はぬ有さ  
ま也やむことなき人のかたはら  
もなきを憚り給は、秋好やこき  
てんをも其遠慮あるへきを  
それには其心しらひもなくて  
かくの給ふは偏に下心あれば也  
391 世にかたくなしきやみのまよひになん  
此詞聞過しかたき所なれともと  
かく院に心よせ有て玉かつらの  
同心なき也後に悔み給ふ事をかゝ  
むためにかやうにさまくわりなき事  
をかけり

「 29 丁ウ

「 30 丁オ



392 位なともあさえたるほとをなと覺す

「 30 丁ウ

是も藏人少將のちに昇進して  
玉かつらのまゝ子の君達うらや  
むさまなる事をかゝむとて也

393 右の大殿御車御せんの人々数多奉れ

玉鬘のしわさは無曲けれども  
よそにみかたくておとなしやかに  
し給へるさま也雲ゐの雁も同じ心  
也世にある事の有さま文意奇也

「 31 丁オ

394 おほしとるかたことにてかうおほし  
たちにしかはともかくも聞えかたく  
て侍るに

母上のしわざのあやしかりしか

案の如なれはあはめ申さるゝ詞也  
395 誰もゝひんなからんことは有のまゝ  
にもいさめ給はて今ひさかへし

「 31 丁ウ

玉かつら女氣のし損しを悔みなか  
らつれなしかほにの給ふ詞也女は  
三従とて夫死ては子にしたかふへ  
き道なるをはしめ中将弁などの  
いさめにしたかはてしゐて女心に  
任せ給ひし事よからぬを後人  
の心すへきいましめにかけるなるへし

396 右のおとゝもひかゝしきやうに

おもむけての給ふなれはくるしうなん

夕霧もわか御子の望みかなはね  
は態さまたけさまにこそその給は

「 32 丁オ

ねあるまじき院参なるへきよしは  
ほのめかし給ひしを玉かつらも

心得給へと私の心ひくかたにて姫  
君をまいらせ給ひて其末かくよ

からねは有のまゝにはいさめ給はて

との給ふ也大やうにて下には院

「 32 丁ウ

参を無用のよし夕霧の給ひし  
事を玉かつらも聞知給へる故

かくほのめかさて有のまゝには

の給てと也

397 はやおほしたつへきになん

是も藏人少將にいもうと君にて

なくさめんと玉かつらのの給ひし事

たかひぬれと又夕霧おとなしやか

「 33 丁オ

にすちめの上にて返答の詞也

398 かきりなきさいはいなくてみやつかへの

すちは思ひよるまじきわさ也けりと

おほうへはなけき給ふ

玉かつらの後悔し給ふさま偏に

世人のいましめ也身に応せぬ事は  
すへて身の苦しみななるへき理也  
399 聞えし人々のめやすくなりのはり  
つゝさてもおはせましにかたわなら

「 33 丁ウ

ぬそあまたあるや

あなつり給ひし藏人少将を初め  
いつれも高官に成のほりて婿

にとり給ひてよろしきかあまた  
有と也師説云はしめ玉かつらの

彼少将にゆるし給はて一念のた  
かひによりてしたしかるへき夕霧

「 34 丁オ

雲ゐの雁こきてん等の兄弟にも

恨みをむすひ今上の御けしき悪く

て中将弁などの愁をのこし今は

みつから後悔し給へり世上に交る人

はおとも女もほとよくはからふ

へしとのをしへなるへし

400 院のうへはうらみ給ふ御心たえぬそ

かし今つゐに事引出給ひてんと思ふ

院も猶昔を忘させ給はす玉か

つらもむかしを思給ふ心有て

姫君をもまいらし給へは終に

いさきよくはおはせしと草子地也

「 34 丁ウ

是兄弟姉妹の中にも心つよくて  
少将をいとひてひめきみを  
院に奉り給ひしも昔を忘ぬ  
ゆかりなりし事をいふへきとて也  
此私心にて終に理を背給へは  
をのつから後悔出来し心の諫也  
401 いまはかゝることあやまりにおさ  
なうおほけなかりけるみつからの心を

「 35 丁オ

はしめ御息所院参のあらましの

時こきてんの女御懇にの給ひしを

頼み秋好中宮も源氏の御ゆかり

におほしゆるさんと頼み給ひて

女御后も下には物ねたみの心

などかなからんの遠慮なくこと

にはかゝしき後見もなくて

院参せしめ給ひし事のみつから

悔きとの歎き也玉かつらの君

六条院におはせし時は実父のお

と、光君など御在世にてよ

ろつつ、しみ深くいつかたにも

さまあしからしと心つかひし給ひ

し故女の本とたに定られ給

に今は髭黒たにうせ給ひて

「 36 丁オ

「 35 丁ウ

誰には、かり給ふかたなきまゝ、に  
只我意に任せてのみし給ひ

しわさの人のもとときをおひ給  
やうになりてみつからも歎給也

若くても老の、ちも万につ、  
しみふかくさまあしからぬやうに後の  
有さま、て遠慮すへき教也

402 宇治のひめ君の心とまりておほゆるも

八宮の御むすめ大君の事也こゝ  
もと椎か本卷の中ほとに当れり  
是も宇治十帖かくへき有増也

(46) 橋姫巻 宇治十帖第一也

403 はかなき御あそひに心をいれておひ  
いて給へれば 此宮の御伝へにて御

むすめ大君中君も箏琵琶す  
くれ給へる事をいはんとてなり

404 かゝるほとにすみ給ふ宮やけにけり  
はしめに北方うせ給ふ事を書て

又かやうの不幸をかく此宮の発  
心のもと也次の詞にこゝにはさ  
へきにや只いとひはなれよと殊  
更に仏などのすゝめおもむけ  
給ふやうなる有さまにてと有

「 36 丁ウ

仏の方便にはかくうきめをみせ  
て菩提におもむけ給ふ事ある  
ことはりをかけるなるへし  
405 そくなからひしりになり給ふ心をき  
て 薫もとより道心あれと出家  
成かたき身なれば俗なから聖に  
八宮のなり給ふ御心掟を習はま  
ほしとみゝとゝめ給ふ也宇治に  
ゆきかよひ給ふ事のもとい也

「 38 丁オ

406 ひめきみの御かたに聞えてあは  
れとの給はせはなんなくさむへき

薫俗ひしりの心はへを願ひてお  
はしなから姫君にゆかしき心を懸  
そめて終に好色の思ひに沈み  
はて給ひし此うち十帖の趣向  
のもと也世に若き人なとすこし  
仏道の心さし有て物まうてなと  
する人の道のゆくてに美色を  
見てもとよりなまうかひなる  
道心のかへりて好色の媒となる  
たくひおほしまことに道心に  
心さゝは一向にあらめせて女人  
はちこくの使ひよく仏の種子を

「 37 丁オ

「 38 丁ウ

「 37 丁ウ

「 39 丁オ

たつ心をしりをそれ侍るへし

407 さらによそに思ひやりしには似す  
いとあはれになつかしうおかし

帚木品定にいかてはたかゝりけん

とおもふよりたかへる事なんあや

しく心とまるわさ也と有したく

ひ也伊勢物語におもほえず古郷  
にいとはしたなくて有ければこゝ

ちまとひにけりといへるも同じ  
408 おこしつる老人のいてきたるに  
ゆつり給ふ 弁のおもと也柏木の

めのとのむすめなれは薫にとはす

かたりせまほしき内意ありければ

さし過てあいさつをも申也  
409 君はひめ君の御返事いとめやすく  
こめかしきを はしめ雲のゐるみ

ねのかけちをと返哥し給へる所

に浅からす哀なりと薫のおほし

次にさしかへるうちの川おさと読

給ふ所にまほにめやすく物し給ひ

けりと心とまりぬれと、あり  
みるにつけ聞にしたかひて心さし  
まさりけはひのゆかしさ添たる心也

410 なからんのちもなとひとことうちほの

めかしてかは 草子の上にはいつ此

事の給ひしとはみえねと此後に

も此おもむきを宮の薫にの給ひ

し事あれは度く参り給ひし  
411 聞えはけまして御心さはかし奉らん  
是匂宮を宇治へいさなひ申中君

にあはせまいらせ後にはくひの八千

たひにて手習の君をさへいたつらに

なしさまくのおもひをし給ふ事の

はしめ也すへて人の言葉は吉凶榮

辱これ其まねく所也とのいまし  
めよくおもふへき物なるへし  
412 そのつゐてにも 句かくあやしう

此にもといふ詞前に姫君達の事

を宮の薫にの給ひし事有し  
と知へし此次手にも又の給ひ出し心也

413 又人きかぬ心やすき所にて聞えん

柏木の事御母宮のうへなれはこと

人に委聞すましき心にてかくの給ふ也

(47) 椎本卷

「 40 丁ウ

「 40 丁オ

「 39 丁ウ

「 41 丁オ

「 41 丁ウ

414 ひめ君はかやうのことたはふれにも  
もてはなれ給へる御心ふかさなり

「 42 丁オ

大君也八宮も薫の心さしあらは  
ゆるし給はん御心にて薫にも其  
おもむきの給ひけれと宮隠させ

給て後大君終に薫に難面て

はて給ひしはもとより此心なりし

故としらせたる詞なるへし

415 す、しき道にもおもむき給ひぬへき  
をた、此御こと、ものいとくおしく

「 42 丁ウ

此姫君達をおほしめす心宮の臨

終にもさはり給ひしと也総角卷

にひしりの夢にも此輪廻により

てえうかひ給はぬよしあり其微

意をこ、にかけり後世を思はん

人のいましめに書なるへし

416 なからんのち此君達をさるへき物の  
たよりにもとふらひ思ひ捨ぬ物に

「 43 丁オ

かすまへ給へなとおもむけつ、

此宮の詞薫の心さしあらは姫君

をゆるし給はん心ありての給ひ

しなり其故に奥にさはかり御

心もてゆるひ給ふ事のさしもないそ

かれぬよと薫の思ひ給へる事を  
かけり此さしも急かれぬ心薫の  
くせにて終に大君を得給はさりし  
草子の有さま也

「 43 丁ウ

417 りやうしたる心ちしけり

宮御ゆるしの御おもむけをも

薫の聞置給へは偏に大君を薫

は我物に領したる心ちし給ふと也

されと大君に其心はへの宮の

遺言もなくた、かろくしき心

つかひ給ふなどの御詞はかり聞置

給へは終に大君は薫に難面て

はて給ひし此あやにくなるとこ

ろ物語のふしなるへし男女の情

も偏に逢みるをのみいふ物かは

あはてやみにしうさをおもひ

なと兼好法しか筆跡あるにや

（二行空）

418 過にし御おもてふせにかるくしき

心ともつかひ給ふなほほろけのよす

かならて人のことにうちなひき此

山さとをあくかれ給ふな

此宮の詞はかるくしき事に

「 44 丁ウ

「 44 丁オ

なひき給ふなどのいましめにて  
薫にも難面くし給へとはあら  
さらめとも大君は其下心を知  
給はねは只一人住にておはせとの  
事と聞給ひしおもむきなるへし

「45丁オ

あけまきの巻にも宮の薫へ

との御おもむけもなかりしよしを  
の給ふ事あるはこゝの御遺言の故  
なるへし此巻のおくにも思はず  
なる事のまきれ露にてもあ

「45丁ウ

らはうしろめたけにのみおほし  
をくめりしなき御たまにさへ

きすやつけ奉らんと姫君たち

のつゝましようおほしける事有

419

かやうにはもてない給はてむかしの  
御心むけにしたかひ聞え給はんさま  
ならんこそ 此薫の詞は宮の御

おもむけ大君をかほるにゆるす

御けしきなりしによりての給ふ也

此たかひめにて二人の御さま文悪也

「46丁オ

(48) 総角巻

420

此の給ふめるすちはいにしへもさらに  
かけてとあらはかゝらはなと行末の

あらましことにとりませでの給ひ  
をくこともなかりし

大君の同心なき故を有のまゝに  
かたり給ふ也八の宮薫にはの給ひ  
をく事有しかと大君にはたゝ

「46丁ウ

かろくしく人になひき給ふなど  
はかりの給ひしかは也たとひ宮の  
御心には薫にはまいらせんとおほ  
すとも大君にはの給ふへくもあ  
らねは大君の心終焉までもこの  
通りにて薫に逢給はさりし也

「47丁オ

421

こよなうもてなしかたふて対面し  
給ふ よのつねの人の上ならはかく  
一向に逢ましきと思ふ人には対

面もすましき也只人伝にのみさし  
いらへもあるへけれどさやうにて  
は何の情も哀もなく物語の

ふしもなければかくのことしかやう  
にあやにくなる二人の御中あ  
りさまなればさまくの情も

風流もある也

「47丁ウ

422

かくはあらてをのつから心ゆるひし  
給ふおりも有なんとおもひわたる

是薫の本性なり此心にて大君  
にも終に本意をとけずもと

かしき有さまなりし此作物語  
の一ふしなりかくて心のまゝにあ

らんは更にあやにくなる風情

も哀もあるましければ也兼好法師

か男女の情もひとへに逢みるを

のみいふ物かはあはてやみにしうさ

を思ひなとかけるも此物語の哀を

うつせる物なるへし

423

この老人のをのかし、かたらひてけ  
せうにさゝめきなとすさはいへとふか

からぬけにや 前にも例の御

そに奉りかへよなとそゝのかし

聞えつゝとあり大君深き心はへ

有て同心なきを弁なと大かたの

あらまほしくかつはめてたき御

事なれはもとかしく見奉りさい

まくるさま也姫君達のうしろみに

て物馴たる弁なから猶深き心

はせをくれたるか又老てひかめ

るにやと草子の地にいふ也たとへ

は大君薫の北方に成て京に出

「 48 丁オ

「 48 丁ウ

「 49 丁オ

給ふとても誰うしろみまいらす  
る人もなければ物の折ことには  
人わろき事もあるへしさすかに  
宮の御むすめにてそゝろなる

妾風情のやうに薫の御心む

けはかりをたのみてはかひなきわ

さならんとおもへる大君の深き心

はへあれは同心し給はぬは理り也

中君匂宮に向へられ給ひしも

薫の浅からすうしろみ給ふ事の

故にてこそみくるしからすおは

しけれそれたに六君おはしては

中君も宮の御遺言を思ひ出て

宇治にや帰らんともおほし大君

の心ふかゝりしを感じ給ひし悔

みとも有し也まして女二宮の御

事は帝の御心むけなれは薫も

辞し申かたくてうけひき給ひ

なんには大君の有さま必中君

の後悔より猶まさりてこそ歎き

給はめされは遠きおもむはかり

有てちかきうれへをとり給はぬ

かたまさりたる心ふかさなるへし

「 49 丁ウ

「 50 丁オ

「 50 丁ウ

前にはまれあらんよりはしりへに  
そしりなからんにはいつれといへる  
心はへ誰も思ふへきことはりにや  
弁などの只今のめてたき事はかり  
を思ひて後の変を思ひやる心  
つかひのなきをろかさをいへる草  
子地の詞なるへし

424 まつゆつり聞えて 薫の心也

中君を匂宮にまつゆつりまい  
らせてと也此あやまりにて終に  
中君をも大君をも薫のとりは  
つし給ひて後悔たひくなりし其  
上浮舟の君の事にはかなき歎  
きし給ひしも皆此しわさ一つ  
より出来たり是柏木のあや  
まちの薫にも猶むくひて  
中君浮舟の君ともに匂宮に  
依てあやしき悔をも歎きを  
もし給ふ有さまを書て不義の  
ふるまひをいましめたる心なるへし

425 弁もまいりてみちひきゝこゆ

弁か深からぬ故の有さまなり  
薫のおはして大君に物の給ひし

「 51 丁オ

「 51 丁ウ

「 52 丁オ

に匂宮のまきれ給ふには気を  
付へき所也かつ心をつけん人いかて  
見損してみちひきし侍らん  
426 われもやうくさかり過ぬる身そ  
かしかゝみをみればやせく  
に

此わたりの詞おくに薫に對面  
し給ひてわかおも影にはつる比  
なれはとの給へることをいはん微  
意にや

427 つねよりもわかおもかけにはつる比  
彼かゝみをみればやせくになり

もてゆくとありし詞の首尾也  
宇治十帖第一の詞なるへしと  
細流にいへり

428 いかでなくなりなんとおほししつむ

此大君かやうにおもひよりは給へる  
よはめに此宮の御座敷に悪霊  
有て見入たるなるへし手習の  
巻にて手習君の霊の顯し時  
ひとりをは取つるよいいへる此女君の  
ことなるへし

429 おまへに人おほくもさふらはす

女宮の御前に人のさふらはぬは

「 52 丁ウ

「 53 丁オ



430 あるましき事とのいましめ也  
若草のねみんものとはおもはねと  
むすほゝれたる心ちこそすれ

「 53 丁ウ

句兵部卿宮そゝろに物くるはしき  
まて色におはしますことをかけり  
いもうと宮にけさうの哥よみ給ふ  
は人倫のあるへき事にあらす  
かくすゝろはしき御心ゆへにまめ  
やかなりし薫の隠しすへ給ひし  
手習の君をもちやうの不義の  
こと有しとの心にかけるなるへし  
此宮は帝きさき御寵愛あさ  
からて春宮にもとおほしけるに  
終に立坊のことをかゝす是かく  
道理に背きたる御心からのわ  
さといましむる心なるへし

「 54 丁オ

431 うらなく物をとひたるひめ君も  
伊勢物語にては業平のいもう  
とにけさうにはあらず憐※〔恨+心〕

「 54 丁ウ

の心なり女の返哥も懸想まての  
心にはあらぬを懸けさうの心にて  
うらなく物をとひたる姫君も  
されてにくゝおほさるといへり

兵部卿宮などやうの好色の御心  
にてはいせ物語の業平の妹をめ  
くみてよめるをも好色に見な  
し給ひて此女一宮の御あへしら  
ひもなく貞節なるに感じて  
にくゝおもひ給へる心也

「 55 丁オ

432 此君の御供なる人のいつしかとこゝ  
なるわかき人をかたらひよりたる  
有けりをかしゝの物かたりにかの  
宮の御忍ひありき制（マツ）られ給て  
大君の御病ひおもひ給はんと  
てさまゝの事さしつとひて弥  
心をまとはし給ふさま也前に句宮  
宇治へおはしなから立より給はん  
よしなきやうになりて帰り給へる  
をはしめにて此六の君の御事  
も宮の忍ひありき制せられ  
給ふ事もみな大君の御胸  
ふたかる事のたね也此後  
にも中君の夢に八宮の物おほし  
たるけしきにてみえ給ひし事あ  
さりか夢に聊うち思ひし事に  
乱てなれたゝしはし願ひの所を

「 55 丁ウ

「 56 丁オ

へたゝれるよしを見たる聞給ひ  
しなとさまく大君の歎きの事  
さしつとひて終に本復なかりし  
有さま是皆よに悪くなるへきこ  
との時節にはさまくの事さしつ  
とふ有さまをかけり哀を尽せし  
筆力なり

「 56 丁ウ

433 これのみなんうらめしきふしにてとま  
りぬへくおほえける

大きみ末期まで猶恨晴給はて  
薫にとけすして果給へるさま也

「 57 丁オ

434 みるまゝに物のかれゆくやうにて  
きえはて給ぬるはいみしきわさかな  
愛別離苦の人間の世の有さま  
を人にしめす書さま也

435 み奉り給ふにかくし給ふかほも只  
ね給へるやうにて

「 57 丁ウ

前に物覚えす成にたるさま  
なれと顔をはいとよく隠し給へ  
りと有て又かほかくし給ふ御袖  
をすこしひきなをしてと書て  
うせ給ひてのちもさなから顔  
かくし給ひし事をかけり最後ま

ても薫になひかてへたて給へる  
事をかきかつ大君の心ふかき御  
用意を見せたるなるへし

(49) 早蕨巻

「 58 丁オ

436 なかむれは山よりいて、ゆくつきも  
よにすみわひてやまにこそいれ  
月は山を出ても世にすみ侘ては  
山ににいるに宇治山を出てゆく我も  
思惟すへきことそと也宿木巻  
六君を匂兵部卿宮のいれ奉り  
給へる所に宇治に帰りいらんと  
中君あらまし給ひて薫へ其由  
申給ひし事あるも中君此哥の  
心はへ始終おはする故の有さま筆力  
寄也妙也

「 58 丁ウ

437 其比藤つほと聞ゆるは  
(50) 宿木巻

藤壺女御は今上女二宮の御母也  
女二宮は薫の北方にまいらせ給  
其事をかゝむとて書出たり扱  
女二宮の御事をかくはかく帝の  
御むすめをえても猶大君の忘  
かたきは慰ます浅からぬ心さし

「 59 丁オ

をいはんとての心としるへし

438 まつけふは此花一枝ゆるすとの給はすれば

姫宮をつかはさんとおほせと薫

の心さしをも御らんし知す

かつ急々なれはとの心にて先けふ

は此花一枝をつかはさるゝとの

御心也先といふ詞心をつくへし

439 やう／＼おほしよりはりにたるなるへし

匂宮の好色にて中君をわりなく

してえ給ひて御心さしも浅から

されとも又六君にも御心離ぬ

ゆへおほしよりはりたるなるへしと

書て其まゝあたる御心なれ

はと書つゝけたりおほしよはる

にはやあたる御心あれば也

440 返す／＼も故宮のの給ひをさしこ

とにたかひて草のものをかれにける

匂宮に逢初給ひしは中君のわさ

にもあらざりしかとも兼てにも此

思案あり逢給ひて後も此あやふ

みあれば返す／＼もといへり又大君

の心のおもさをいはんとて也すへて

身に応せぬさいはいをねかふは愚か

「 60 丁ウ

「 60 丁オ

なる物のわざなるへしたとひよ

きになりても此中君のあや

ふみのことくやすからぬ思ひ絶す

としらしめんとての事ならんかし

441 猶此御けはひ有さまを開給ふたひ

ことになどてむかしの人の

中君を匂宮にまいらせし後悔也

さるへき故有とも兄弟親子の

むつまじき人ならては女中に

心やすくちかつくまじきいましめ

也必此心あるへければ也薫のこと

きまめ人たにしまりましてこと人

は仲人なとまでせしむつまじさ

をも心ゆるすまじきことなるへし

其いましめの心則おくにあり且

又心さしをたてゝすこし道の心も

あらん人は人のゆるして近つくる

とも男女の中は道ある事なれば

遠慮してちかつくまじき事也

442 みつからとさへの給へるかめつらしく

薫中君にまよひ給ひてかくこゝ

ろあさき人に似たるをこかましきの

ある事をかきて後人のいましめと

「 62 丁オ

「 61 丁ウ

「 61 丁オ

するなるへし次の詞にさは年比  
のしるしもやうくあらはれ侍る  
にやとの給へる片腹痛きわざ也  
443 かつはいひうとめ

中君にまよひ給ふゆへ初め匂宮  
に大切の媒のさまとはかはりてをこ  
かましき有さまを書いて世人必か、  
る心さしを持ましきいましめとする也  
444 御袖をひかへつ

此段師説湖月抄にあれば略之  
445 さばかり心ふかけにさかしかり給へと  
おとこといふ物の心うかりける事よ  
是男にも女にも遠慮あるへき  
いましめの詞也

446 何ことにかといふまゝに几帳の下より  
中君は浮舟君の事を語出給はん  
とての給ふ事を中君にまよひ給  
薫の心より我になひく御心かとお  
もひ給へるふるまひ也偏にいましめ也

447 ふたりして栗なとやうの物にやは  
ろくくともふも 女などのしらぬ所  
にて誰かみるらんもしらてさも  
しく物くふましきいましめ也

「 62 丁ウ

「 63 丁オ

「 63 丁ウ

(51) 東屋巻  
448 いと人き、かろくしうかたはらいたか  
るへきほとなれはおほしは、かりて  
高貴の人の其ほとに似合ざる  
ふるまひは世の聞え人のおも  
はくもよろしからねはすましき  
ことのいましめに薫の此遠慮  
あることをかけるなるへし

449 こたひの頭はうたかひなくみかと  
の御口つからこて給へるなり  
仲人の空言世上なへての習ひ  
なれはかれかいふまゝには聞とる  
ましく思ひはからふへき教にかけ  
るなるへしすへて其ほとならず  
過分の事を人のいふにはあやし  
と心をつけてかんかへはからふへし  
あやしと心の付事を今一たび  
思案せされは失をとる事おほ  
きものなり

450 屏風のつまよりのそき給ふ  
師説湖月抄にくはし  
451 物つ、みせすはやりかにをそき人にて  
此乳母の事を浮舟巻にても匂宮

「 64 丁オ

「 64 丁ウ

思ひいて給ひしこゝの事なるへし  
452 かたはらいたきこと、思給へてかまの

「 65 丁オ

さうをいたして 前に物つゝみせ

すはやりかにをそき人にてと

と有し首尾也

453 大宮此夕より御むねなやませ給ふを

前にきさいのみや例のなやま

しくし給へはと有し首尾也文

法妙也

454 なこりおかしかりし御うつりかも

浮舟巻にて宮に心つよかるま

しき心はへかねてみえたるさま也

455 心ゆく道にいとむつかしき事

そひたるこゝちす

世に物を氣に懸るといふ事也

浮舟君宇治へおはする始めに

かやうの事あるは行末よかるまし

き前表との心也前に浮舟の事を

かたしろとの給ひしことを後に

も不吉の事に薫の思合せ給へ

る事あり此次にも楚王の台の

上夜の琴の声と吟してさるは

扇の色も心をきつへき閨の古を

「 66 丁オ

はとありかた／＼末よろしかるまし  
きしるしあるやうの書さま也

「 66 丁ウ

(52) 浮舟巻

456 例のいとのとけき過たる心からなるへし

のとけき心は温和なればよき也

過たるは猶及はさるかことし

此薫のくせの失あるにて人に

いましめたる詞也

457 あやしきまで心をあはせつゝゐてあ

りきし人のためうしろめたきわさにも

湖月抄云好色にまよへる人の不

仁不義におちいる事をしるして

いましむる也<sup>云</sup>勾宮の頼もしけ

なき御心はへ民の父母なるま

しきありさまをいひて後人の

心をはけましむる詞なるへし

458 おもひもよらすかいはなつ

女とちすむ所にてはよろつ心をつ

けてかやうのあやまちする事な

かれとのいましめにかけるなるへし

此物語は作りことなから河海に

ひく所の義孝少将の通ひける

所に兵部卿致平親王まかりて

「 67 丁ウ

「 67 丁オ

少将の君おはしたるといへせし事は  
実事也されは世にある事な

459 君<sup>きみ</sup>はあらぬ人なりけりと思ふに浅ま  
しいみしけれど

浮舟君貞節の人ならはあらぬ

人とみるよりいかにものかる、やう

はあるへけれと薫も此巻の奥

に色めきたるかたはそひたる人

そかしと思ひ知給ふ事有且又

東屋巻にもあやにくち給へ

りし人の御けはひもさすかに

思出られて何事にか有けんいと

おほく哀けにの給ひしかな名残

おかしかりし御うつりかもまたのこ

りたる心ちしてなとあり匂宮に

ひかる、心もそひたる人の有さま

なれば此ときもはかしくしからて

終に身のためあちきなき事に

なりたり貞女二夫をかへすといふ

事は偏に万人のいましめと知へし

460 心もなかりける夜のあやまちを  
思ふに心ちもまとひぬへきを

「 68 丁オ

「 68 丁ウ

「 69 丁オ

実に留守なと女とちある人の用  
心を教ゆる也

461 いまはよろつにおほ、れさはくとも  
かひあらし物からなめけなり

此右近かのめのとの降魔の相を

いたせしことく真実に主

君浮舟をおもふ心ある正しき物

ならはこゝにてたにはかしくし

く宮をいさめて返しまいらす

へしわか頼む薫に不忠不義を

忘れ浮舟君にため悪き事を忘

て只宮に無礼也なと思ひて心を

あはせ偽のはかりことをなしつゝ、

終に浮舟君をいたつらになしはて

たるははかなき有さまを書て

後人のいましめとす

462 此人よにしらす哀におほさるゝ、

まゝにはよろつのそしりをも忘給ぬへし

前にも京にはもとめさはかるとも

けふはかりはかくてあらんと有し

首尾也此段師説湖月抄に委

463 けちかきさまにいらへ聞えなとして  
なひきたるを

「 69 丁ウ

「 70 丁オ

「 70 丁ウ

まへに心さしふかしとはかゝるをいふ  
にやあらんと思ひしらるゝなど  
有たとひ心さしふかくともわか  
もとつ人を、きてたかまことを

「71丁オ

頼むへきとかたく思ひひとりてこそ  
二夫をかへぬ節婦の名はとゝむ  
へければかなくをろかなる心なる  
へし今の世にても貞操を忘

てあたる密夫にまよふ女は  
みな此浮舟の君のことく身の  
はてはかなからん事を書いて人を

貞女の道にみちひくなるへし

464 大とのゝ君のさかりに匂ひ給へるあたり

「71丁ウ

にては 此段の師説湖月抄<sup>二</sup>委

465 こまやかに匂ひきよなる事

此段の師説も湖月抄に有

466 かねてかうおはしますへしと承りま  
しにもいと忝れはたはかり聞えさせ

右近か有さま彼乳母とは雲泥  
の心あり主君をいたつらになし

まいらせしもむへなるさまを書いて

後人の女の後見なとせん心はへ

を教ゆるなり

「72丁オ

467 何ことも人よりはこよなうまさり  
給へる御さまにてすゝろなる事

おほしいらるゝのみなん罪ふかゝりける  
例の筆誅也世俗にも万能一心

とかやいへり敬の字を忘へからず

468 御ともの人みなきぬはかりおそろ  
しうわつらはしきことをさへおもふ

かゝる道の空にもし不慮の狼

藉もあらはとおそろしく且又か

く大切の宮を此難所の雪道<sup>二</sup>

御供申せし聞えあらは各のとか

なるへき事を煩らはしく思ふ也匂

宮一人好色のつゝしみましまさぬ故に

あまたの人をなやまし給ふあちき

なさを書いて主君なるへき人は下

下の上までおもひやりてよく独を

つゝしみ給ふへき教を書なるへし

469 右近いかなりはて給ふへき御有さま

にかとかつはくるしけれとこよひはつゝ

ましさも忘ぬへし 先度一夜は是

非なし今夜も亦宮に逢給はゝ

たひかさなりて若聞えなとあら

むにいかに成果給ふへきとくるしな

「73丁ウ

「73丁オ

470 恨給ひしさまの給ひし事とも面影に  
つと添て聊まところめは夢にみえ給つ、  
世の密夫を思ふ女のさまなへてかく  
こそあらめはては身をうしなふに  
至る悲しむへし

「 74 丁オ

471 いつしかと思ひまとふ親にも思はずに  
心つきなしとこそはもて煩らはれめ  
身をたて道ををこなひて親の  
名をもあくるこそ孝行のはしめ  
と聖人もの給ひつれかくさまく  
心をつくす親にももてわつらはれ  
物を思はする事只一念の不義よ  
りをこるわさぞとしらせて親の  
孝を思はん人は不義悪行をつ、  
しむへしとのをしへのためと知へし  
雨ふりし日来あひたりし御使とも  
そけふもきたりける

「 74 丁ウ

472

「 75 丁オ

是たひかさなれはあらはるゝ道理  
を書て改過の心なき人のあちき  
なさを人に示す也人しらしと思ふ  
事も思はずにあらはるゝさま皆  
かくのことしされはおほしすして  
なしたるわさも不義なりといふ  
事をしらは即時に改めて其後  
をたにつゝしむへしもとよりなさ  
さるさきに不義をしらは湯をさく  
るかことくおちをそれて手をたに  
ふれすやみ侍るへし若知つゝも不  
義悪行をなさん人は親に不孝  
君に不忠仏神にも疎まれ果侍へし

「 75 丁ウ

473 あゆみ出給ふまゝに何事そと問給ふ此  
人のきかんもつゝましと思ひてかしこまりて  
をる殿もしか見知給て出給ひぬ  
此隨身かとくしき物にてと有し首  
尾也次第の心つかひ皆かとあるさ  
まを書て人の従者の心つかひを  
教ゆる也薫も其けしきを見取  
給ひてしるてこゝにて問給はさ  
りし臣臣たれば君々たり是また  
人に見習はしむるわさなるへし

「 76 丁オ



474 人のため後のいとおしさをもちにたと

り給ふまし 匂宮の本性のくせを

思給ふ也只今の御心になふやうは

かりにて後に人の煩ひなるへき遠

慮おはせぬ宮也浮舟をわりなく

盗み出ん必心を合せ給へと押立て

の給ふも浮舟の身のため害なる

へき遠慮もおはせぬさま也浮舟も

しるてかやうにし給は、人間はち

かましきこと出来なんとはたはり

なき女心に歎きあまりて終に身

をなけん心いてきたる有さま也

475 すゝろならんものゝはしり出来たらん

もいかさまにかと まことにあやう

き御有さまあるましき事を書いて

恋地にまとふ人遠慮あるへきい

ましめにかけるなるへし是皆作

物語ながら兵部卿宮の本性にては

必かやうにあるへき物のいきをひを

よく書いてられてまことに現在あ

りし事のやうにみえ侍り又奇妙也

(53) 蜻蛉卷

476 なとかさしもめつらしけなくはあらんと

「 76 丁ウ

「 77 丁オ

「 77 丁ウ

心つよくねたきさまなるをまめ人はす  
こし人よりことなりとおほすになん有ける

なへて匂宮になひかぬ女はなきに小宰

相はなとかさしも珍しけなく人なみに

はなひきまいらせんと貞節なるを薫

は寵異し給ふと也浮舟のあたなりし

に對してかくおほす有さまなるへし

千万人のなひく人にもわかたに貞

節ならは誰か数寄事をもすへき

只其女の心一つのわざと教ゆる心

なるへし奥に見し人よりも是は

心にくきけそひてもあるかなと

477 あり是亦浮舟に對してかけり

めたうのかたのさうしのほそくあき

たるより 女一宮の御方は紫上の

そたてまいらせ給て明石中宮の

御掟もくは、れはかくそさうの

事はあるましきわさなるに下臈

女房のとみの事にてあけなから

おりにける也下らふの心つかひ

のしとけなく物なれぬ有さまを

書て例の又いましめにかくなるへし

478 心つよくわりて手ことにもたりかしら

「 78 丁オ

「 78 丁ウ

「 79 丁オ

にうちをきむねにさしあてなと

是次さまの人のさまあしきさま也

中／＼物あつかひにいとくるしけなり

たゝさなからみ給へかしてて笑ひ

たる小宰相かさまのしつまりて

人よりことに用意あるをいはんとて書る也

479 かゝるすちに御身をもてそこなひ人

にも心つきなき物に思はれ給ふへき

匂宮を春宮にもとおほせとその

器におはしますましきにやと歎き

給ふ詞なり心をつくへし

480 君にもいひ伝へすさかしたちて

宮仕へ人の心つかひの教にかけ

り薫などやうの貴人にはうち

つけにかくいらへすへきにあらす

無礼のわさなり宮の君にいひつ

たへて其口うつしをこそ申へきわさ

なれされは次の詞になみ／＼の人

めきて心ちななさまやかほるの

おほしたるよしあり

481 松もむかしのとのみなかめらるゝにも

是宮の君のみつから直に薫に

申給ふ答へ也これ亦さしも式部卿

「 79 丁ウ

「 80 丁オ

「 80 丁ウ

宮の御むすめにてはかる／＼しき

わさ也此女房してこそ答へさせ給ふ

へけれされは次の詞に只なへての

かゝる栖の人と思はゝいとおかしかる

へきを只今はいかてかはかり人に

声かきすへき物とならひ給ひけん

となまうしろめたしと有さてこ

こに此ことをかくかける心は前に女

一宮の御かたの事をいふに猶此御

あたりはいとことなりけるこそ

あやしけれ明石の浦は心にくか

りける所かなとほめて其対に

此宮の君さしも式部卿のいつき

むすめにて有したにかくかる／＼

しき所ある事をいひて明石上の掟

のおも／＼しくよし有ける事を

いよ／＼いひ此次に宇治の宮の御

むすめたち大君中君かたほなら

さりしをいはんとて決前生後の心

はへにかけるなるへし

482 (54) 手習卷

されと観音とさまかうさまにはくゝみ

給ければ はくゝむは鳥の子を

「 81 丁オ

「 81 丁ウ

「 82 丁オ

母鳥の羽につゝ、みいたはる心よりい  
へる詞也此浮舟君の立願に母の  
毎年に初瀬に詣させし婦さに  
宇治にて薰見初給ふ事宿木巻

に有又東屋巻に二条院にて乳母  
の詞にされと観音おはしませは  
と頼みをかけし事あり浮舟巻に  
も右近観音を事なくあらせ給へ  
と浮舟君のために祈りし事又

ことなく暮させ給へと初瀬石山に  
願かけしといひし事も有此巻にも  
初瀬にて尼君霊夢有て婦さ

に宇治にて此君を拾ひて観音  
の給へる人也といへりし事ありこゝ  
にてすてに物のけのとりまいらせん  
とするにとかくはくゝみ給ひてと  
いへり大悲の力頼もしき験をいふにや

483 あたしの、風になひくなをみなへし  
中将心おこりして勿論なひくへき  
人と思ひて我しめゆはんなど押

484 あま君はやうはいまめきたる人にそ有  
けるなこりなるへし 此有さま世を

「 82 丁ウ

「 83 丁オ

「 83 丁ウ

捨たる老尼に似合されは也手  
習君すてに五戒をたもち額は  
かりなれとも出家のしるししたる  
人にまことの比丘尼ならは態菩

提をもすゝむへき物を墮落  
をすゝむる事尤むすめのかはり  
と養ひて中将をしたふ心に  
ひか事（ヒカゴト）といへとかの僧都の堅  
固に女のすちにつけてまたそ

しりをとらすとの給ひ又何かし  
此しるへに付て必（ツギ）をつみをえ侍らん  
なといへりし心にはたかひたれは也  
此次の詞にもさすかにかゝるこたい

485 わかやくけしきともはいとうしろめたう  
此尼君をしたる媒もせんかと心  
もとなくおほすと也此うしろめた  
う覚ゆといふ詞二所に有興なる

は少将尼をうたかふ心也心は替る也  
486 是のみそいける仏はしるし有てお  
ほえ給ける 浮舟君初瀬にまうて

給へりしかと此世のための祈は  
かひもなく不幸なりしに入道の

「 84 丁オ

「 84 丁ウ

「 85 丁オ

487

かやうなる事をおほし急くにつけてこそほのかにあはれなれ

はいとけて菩提におもむき給ふはかりはしるし有て覚え給ふと也  
尼君初瀬にまいらすは必此本意とけさせ申ましきに初瀬の留守にしも此本意のかなひしは是も  
仏の方便なるへければ也前に浮舟の君あまになし給てよさて  
なんいくやうもあるへきと尼君にの給ひしにいとおしけなる  
御さまをいかてかさはなし奉らんと有しをおもひあはすへし

此詞おもてのうちき、は此よのつねの色なる衣裳を急きいとなむにつけてわか昔の事少思ひ出ると大やうにいひ給へると聞えて若なくならん跡にても浮舟君なりしと尼君聞合む時はかやうのわかため  
の追善のいとなみをみるにつけてわか身即それなれはほのかに哀に思ひ出るとの給ふ事の心になる詞也さて隠さゝりし由をいふ詞也

「 85 丁ウ

「 86 丁オ

「 86 丁ウ

488 ましてこと人はいかてかと聞えさす

小宰相か心つかひ神妙也中宮のつ、ませ給ふらん事を宰相申さいまくらん事君に憚りある儀也宮仕人の心つかひのをしへにかけり

489 かの事またさなんと聞つけ給へらは

此詞今手習の君を匂宮の物にしをかせ給ひけんといふにおとしつ  
けての給ふ也かくの給ひてはたとひ匂宮の物にておはすにてもとかなし  
ましてさもなければ大宮の御返答の有さまにて匂宮のしらせ

給はぬ事としらるゝなれは心見に

490 聞えんかたなかりける御心のほとかな

此詞大宮の匂宮のまさなきしわさを薫に謝し申給ふ心あり

491 かゝるすちにつけていとかるくうき物

にのみ世にしられ給ひぬめれは心うく匂宮の有さまの世の聞え東宮

にとの御本意のやうには有難けなるを歎かせ給ふさま也好色にふける人の終に身のためあちなきいましめ也

「 87 丁オ

「 87 丁ウ

夢浮橋卷

492(55) 此卷の名の事湖月抄に委

493 おとしをき給へりしならひにとそ

細流云かやうにして行末をかゝさる

は見はてぬ夢のさま甚深微妙の

趣向とみえたり 私案 かく見果ぬ

夢の残おほかる書さま餘情限なし

手習君生て世に在なからかく様々

の哀深き薫の行末もしらておはす

へきも本意なかるへきにかくはかり

聞出尋給ひては既に今一度逢見

給はん斗也逢み給はんに付ては

かく世を捨形をかへ給ひし人の御事

薫も仏道には心深き人の何の昔

に帰る情もあらん且又匂宮のうき

事を薫も慥に聞出給へり手習

君も薫に其事きかれ給て何の

面目有て二たひ対面のかひある

情をみえ給はんたかひの心にもあ

はてやみ給へる由の書さまこそ

哀深く巫山の神女か雨となり雲

となりけん幽玄の面影して実

深甚微妙には覚え侍れ是誠の夢

「 88 丁オ

の浮橋には侍るならし然るに此卷  
のかく残多くてやみにしをほいなく  
思へる後人のわさにて山路の露と  
かや一卷書添て此比よにみえ侍し

是式部の筆の絶妙の所を知らる  
のみにあらず後学のみる目をおほ  
ひくらます事はなはたし彼東哲

か南陔白華華黍由庚崇丘由儀

の補亡の詩を文選にのせられたる

たに朱子の詩の集註にはとらす須

溪劉氏も南陔の六詩はもとより

た、声のみ有て其調はなきを

東哲か補亡いはれなしとて笑ひ

たりけるたくひなるへし

「 88 丁ウ

「 90 丁オ

「 89 丁オ

元禄七年八月十五日向南月下染筆而  
同年十月廿五日北野影前終功畢

法眼季吟

元禄八年六月三日重而清書之

「 90 丁ウ

源氏物語日本紀准拠 物語中以日本紀之古事  
書所多而委註諸抄今略之  
問河海抄云此物語を始め一条院御覽  
有て不可説之物也式部は日本紀を

よくこそみたりけれと仰らるる時に左衛門内侍此論言を妬て日本紀の御局と号せり云々紫日記に此事を戴た

「 91 丁オ

り此事源氏物語のいかなる所の日本紀に似たる事有や答是此物語の

大体桐壺帝より初て帝王四代の年

紀七十餘年の興廢を書る所すへて

日本紀の有さまに似たり又しゐて其

准拠をいは、まづ桐壺帝更衣光君

をうみ給ふは陰神陽神の日神をう

みしに准すへし其故に光君といふ名

あり日本書紀云於是共生二日ノ神二号二大日

靈貴一此子光華 明彩照に徹於六合之内

云々又光君の御弟冷泉院を月神

に比せり日本書紀二次生二 月ノ神一其光彩 垂

レ日ニ以テ配レ日ニ而治一云そのゆへに紅葉賀

卷に光君と冷泉院の御事をいふに

けにいかさまにつくりかえてかはをとら

ぬ御有さまは世にいて物し給ふへき月

日のひかりの空にかよひたるやうにそ

世の人おもへる云々又光君すまの巻にこの

かみの朱雀院の御宇に須磨の浦に

おはしまし住吉の神の道ひき給ふまゝに

「 92 丁オ

明石巻にてあかしのうらにおはし前播磨守新發意いつきいれ奉りて其むすめ

あかしの上に逢せ申てみこ出来たる事は

日本紀に彦火々出見尊このかみの火闌

降命の其ものとの鉤を責ることの

故にて海の畔に吟行給ふに塩土老翁ハタサマヨロヒのはかりことにまかせて海の宮に

至り給ふに海神は重畳をしきてい

れ奉り其むすめの豊玉姫にあはせ申

てみとせおはすほとにうかやふきあはせすの

みことはまれ給へるに比す又明石の姫君

いまた生れ給はぬほとに光君帰京し給ひ

て後彼浦にて生れ給へりしもうかや

ふきあはせすの尊もひこほゝてみのみこ

と帰り給へる跡に海浜の産屋にて生れ

給へるさまに似たり彼明石巻に光君

の御さまを明石上の思へる詞にさうしみは

をしなへての人たにめやすきはみえぬ世界に

よにはかゝる人もおはしけりと見奉り

しにつけて身のほとしられていと

はるかにそ思ひ聞えける云々日本紀

に豊玉姫彦火々出見尊をみていへ

る詞に骨法非常若徒天降者当レ有二

「 92 丁ウ

「 93 丁オ

「 93 丁ウ

天垢アマカサ從ツク地來チライ者當ハ有ツク二地垢チカサ一實マコトニシテ是妙  
美之虛空ソノツツ彦ヒコトイフモノ者歟云々此明石上ツキイシノカミを都に  
むかへ上せ給ひて紫上ムラサキノカミの妬ヤミみを憚りて  
しはし大井オホイの川辺カハヅレにをきて時々通ひ  
給ひしこと松風薄雲等マツフエノウスクモナドの巻マキにあ  
るは允恭天皇インキョウノミコ衣通姫ウツトツリノメをむかへとり給  
ても皇后忍坂大ニノサカノオホ姫命ヒメノミコトの妬ヤミを憚りて  
河内国茅渟カハチノチヌの宮ミヤにはなれすへて時々  
行幸し給ふ面影オモかげあり此允恭天皇インキョウノミコの  
太子木梨輕皇子キナシカルノミコ容姿佳麗ユウサケイレイみるもの  
をのつからめてぬ同母妹ドウボイモイモ大娘皇女オホニギノミコ亦  
艷妙太子常オシロイタマシノミコに逢見オモミんことをおもふ  
つみあることををそれて黙モクせりと  
云々勾宮ツクミヤかたちめてたくおはしてはら  
からの女一宮メノイミヤの御有ミナリさまをいみしと  
めて、業平ノノラヒラの妹イモにねよけにみゆる  
とよめりし絵エをみせまいらしてうち  
とけてねみん物モノとは思はねとむすほ、れ  
たる心ちこそそれとの給へるに似たり  
此勾宮薰大将ツクミヤノカスミノオホノボロの思おもひ人浮舟君ウキフネノミコを宇治  
に隠し置給ひし所へ大将のおはしたる  
まねして終に密通ヒソカニツトの事も日本紀十二  
に履中天皇羽田矢代宿祢タヤノヤシノミコかむすめ

「 95 丁オ

「 94 丁ウ

「 94 丁オ

黒媛クロヒメを妃とし給はんとて納采既に  
をはりて住吉仲皇子履中天皇ツクギノナカノミコの御  
名ナをかりて忍しのひて黒媛クロヒメをかしつ  
黒媛クロヒメは只履中タテマツのおはしつると思ひて  
逢初オモハシたるにかよふへし此浮舟君ウキフネノミコを  
はしめ薰宇治カスミノウジにてのそきみ給ふに故  
大君オホノミコによく似たりしを哀に覚えて世の  
中ナカに大君おはしけりといひなくさめまほ  
しとある事日本紀ヤマトノミコトに天稚彦アマノハヒコうせて  
味稚アジノ高彦根タカヒコネの神喪カミナシを弔なぐさひに天に  
のほり給へりしに此神カミの形天稚彦タマノハヒコ  
に似たるを天稚彦タマノハヒコの親屬オホノミコト皆吾君  
猶おはしけりといひて帯オビをよちひきて  
且喜ヨシひ且いためるにかよへり是らの類  
猶多ヨシけれと悉スベシには難註ナニシテかやうの事と  
もにてや日本紀ヤマトノミコトをよくみたりとの論言ロノコトに  
預アツけん  
源氏物語止観説  
一部始終イチブシヨウみなつくり物語なれば空  
光源氏ヒコタケミチは西宮左大臣ニシノミヤノサダメノミナシ一世イツセイの源氏ゲンジなるに  
准タテマツし桐壺キリウの帝ミカドを延喜聖代エンキノホウに准し  
其外ソノトモ其ソノかける事をのく古来の例  
ある事を准タテマツしてかけるは偏ヒナになきこ

「 96 丁ウ

「 96 丁オ

「 95 丁ウ

とにあらすとみるは假されは空にも  
あらず假にもあらざるは中道実相  
是一心三觀空假中の三諦此物語の  
ありさまなりとするを此草子の止観  
の説といへり亦湖月抄に源氏物語  
一部のすかたを有門空門非有非空門  
亦有亦空門の理にあつる説あり  
といひしも尤一部の有さま正しく  
ある事と見ゆるは有門の理也然とも  
桐壺の帝更衣をはじめ光源氏君  
其外も皆作り物語なれはことく  
くなきこと、みれは空門の理なり  
又作物かたり古例ある事とも也且又  
人々今日の身の上に皆ある事也さ  
れはあるにもあらずなきにもあら  
すとみるは非有非空門の理也然は又  
なく又ありとみんは亦有亦空の理也  
猶此物語のうへのみならず世間森羅  
万象みなかくのことし三世皆此理の外  
なしされは此物かたり人のこのむ所の姪  
風をもて書つらねて善道にみちひ  
く媒として中庸の道にいれ中道  
実相のさとりにいるへき方便の權教

「 98 丁オ

「 97 丁ウ

「 97 丁オ

のよし諸抄にいへる物なるへし  
読覆醬集遊石山寺詩 七松子  
半日幽閑入字廬 窓前數帙扶衣魚  
紫藤言葉国朝宝 那箇人稱浮艷書  
てにをは少々  
やは かはといふ詞也すへて歟といふ詞は  
下にをく也やといふ詞は上に置也  
たとへは春やむかしの春ならぬといふ  
いへるは春は昔の春ならぬかといふ  
心也花や雪といふは花は雪かと云儀  
也其ごとく下にかはといふへきを上  
にてやはといひとてにをは也  
桜花春くは、れるとしにたにも  
ひとのこゝろにあかれやはせぬ  
是も人の心にあかれぬかはあか  
れよといふへきを上にてやはといへる也  
しなのなる浅まのたけにたつ煙  
をちこち人のみやはとかめぬ  
遠近人の見とかめぬかは見とか  
むへき事をとの心也又下にやは  
とよむ事もありまさしやむく  
ひなかりけりやは是もむくひの

「 99 丁オ

「 98 丁ウ



なかりけるかは報ひはあるとは  
又かはといふ詞をも上にをく事有  
たれかは春をうらみはてたる  
等のたくひあまたあり畢竟や

「 99 丁ウ

はとかはとはおなし心の詞にて  
やはと下にをくにはへしやはあ  
りやはけりやはなといふ也かはと  
とむるにはへきかはあるかはけるかは  
といふ也他流には色々やはいふ  
詞を釈したれと此方には不用  
之されと心は何も通すへし

「 100 丁オ

源氏をくえんし けんそくをくえん  
そくといふたくひさすかをしかす  
か さるはしかるは等の事は五  
音のひゝきにいていふ詞也くえの  
二字を文字を返すやうに返せば  
けになる也 しかといふ詞も五音にて  
返せばさになる也 しやうといふへ  
きをさうといひしやうそくしやうの  
ことをさうのこと笙のふえをさう  
の笛の類もおなし又しよふんを  
そふんといひけんしよをけんそと  
いふも同義也物にそ有けるを

「 100 丁ウ

物にさりけるといふも そあと  
いふを五音のひゝきにてさといは  
るゝ也けらしといふ詞もけりと  
いふへきを らしといふ詞五音にて  
かへせはりとなれば也 かくるへは  
隠れ也 ろへといふ詞れになれば也  
いひけらくはいひける也おもへらく  
は思へる也此たくひあけていひかた  
し他はこれに准してしるへし

「 101 丁オ

いかにせんいかにせんおなし詞也いかに  
とはぬる詞うたにはいかにといへるなり  
すへてはぬる詞はにとつかふ事連綿  
也丹波路をたにはち牽牛子をけ  
にこしの類也又いかゝせんともいへり  
いかにせんといふへきをはぬる詞を  
略していかにといへる也たとへは喜撰を  
きせ越前をえちせ左衛門をさゑ  
も左近をさこといふたくひなり  
はぬる詞を略しあるはにとつかふ詞  
あけていひかたし又はぬる詞をみ  
とつかふ事もありをんなをを  
みな ふんをふみせんをせみかんを  
かみのたくひあけていふへからす又み

「 102 丁オ

「 101 丁ウ

といふ詞をはぬる事もあり或はうと  
つかふる（マ）もあり かみのきみをかんの君  
左衛門のかみをさゑものかうなどの  
たくひなり

┌  
102 丁ウ

かよはきかくろきかまけてかほそきの類か  
の字は発語也猶古き詞にいの字を発  
語にせしもおほし いゆきは、かり  
いそはへ いた、せる いかくる、 いつもる  
皆万葉集の詞にて行は、かりそ  
はへ（戴）た、せる（立也）隠る、積る等

（みやがわ・しんや 本学大学院博士後期課程）

の詞にいの字を添し也此類もおほし

┌  
103 丁オ

見つゝををらん 見てをまいれ わか子  
にてをあれよ ぬれてをゆかん なみ

たとをしれ 恨みとをしれの類も

おほし又うれしも悲しも霧立

らしも等のもの字も助語也

┌  
103 丁ウ

元禄乙亥林鐘初六染筆於近水亭而欲

伝児孫不可有外見者也

同十一日校合畢

七松子

雖私家伝不出窓外依御執学

不浅奉免御書写者也

元禄十五年小春吉祥日 季吟法印（朱方印・向南）

川越少将殿

（遊紙1丁）

┌  
┌  
104104 丁オ  
丁ウ

〔附記〕 本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧・翻刻・複写等にご高配を賜りました各所蔵機関、『源氏物語微意』の閲覧・翻刻をお許しくださいました日本大学図書館に深謝申し上げます。

## 『微意』『湖月抄』『集成』『増註』『大成』対照表

## 【凡例】

- 一、『源氏物語微意』の各項に掲出される『源氏物語』本文の冒頭部について、板本『湖月抄』、『源氏物語湖月抄』（新典社、昭52・7～53・7、北村季吟古註釈集成7～17。以下、『集成』）、『増註 源氏物語湖月抄』（猪熊夏樹補註、有川武彦校訂、弘文社、昭和2・9～3・10。後に講談社学術文庫に収録、昭和57・5。以下、『増註』）、『源氏物語大成 校異篇』（池田亀鑑、中央公論社、昭28・6～29・2。以下、『大成』）のそれぞれにおける対応箇所の所在を一覧にした。
- 一、「項番」には『微意』の注記ごとの通し番号、「巻名」には『源氏物語』の巻名、「湖月抄」には板本『湖月抄』の丁数と表裏、「開始行」には板本『湖月抄』および『集成』の対応本文の開始行数、「集成」には『集成』の巻数と頁数、「増註」には『増註』の頁数と対応本文の開始行数、「大成」には『大成』の頁数と対応本文の開始行数を記した。対応本文を有さない場合は斜線で示した。
- 一、「備考」欄に記すべき内容が長文になる場合には※印で示し、頁末に記した。

| 項番 | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註      | 大成      | 備考 |
|----|----|------|------|--------|---------|---------|----|
| 1  |    |      |      |        |         |         | ※1 |
| 2  | 桐壺 | 3丁オ  | 4行目  | 2巻 9頁  | 4頁 3行目  | 5頁 9行目  |    |
| 3  | 桐壺 | 5丁ウ  | 4行目  | 2巻 14頁 | 9頁 2行目  | 7頁11行目  |    |
| 4  | 桐壺 | 6丁オ  | 1行目  | 2巻 15頁 | 9頁 5行目  | 7頁13行目  |    |
| 5  | 桐壺 | 6丁オ  | 6行目  | 2巻 15頁 | 10頁 2行目 | 7頁 2行目  |    |
| 6  | 桐壺 | 13丁ウ | 12行目 | 2巻 30頁 | 22頁 8行目 | 14頁 8行目 |    |
| 7  | 桐壺 | 18丁オ | 4行目  | 2巻 39頁 | 29頁 9行目 | 17頁13行目 |    |
| 8  | 桐壺 | 19丁ウ | 4行目  | 2巻 42頁 | 31頁12行目 | 18頁13行目 |    |
| 9  | 桐壺 | 26丁オ | 3行目  | 2巻 55頁 | 41頁11行目 | 23頁13行目 |    |
| 10 | 帚木 | 7丁ウ  | 1行目  | 2巻 86頁 | 67頁 7行目 | 39頁14行目 |    |
| 11 | 帚木 | 7丁ウ  | 4行目  | 2巻 86頁 | 67頁 9行目 | 40頁 1行目 |    |
| 12 | 帚木 | 8丁ウ  | 6行目  | 2巻 88頁 | 70頁 6行目 | 40頁14行目 |    |
| 13 | 帚木 | 9丁オ  | 2行目  | 2巻 89頁 | 70頁11行目 | 41頁 5行目 |    |
| 14 | 帚木 | 14丁ウ | 10行目 | 2巻100頁 | 84頁 5行目 | 46頁11行目 |    |
| 15 | 帚木 | 15丁オ | 4行目  | 2巻101頁 | 85頁 3行目 | 46頁14行目 |    |
| 16 | 帚木 | 15丁オ | 9行目  | 2巻101頁 | 85頁 6行目 | 47頁 3行目 |    |
| 17 | 帚木 | 16丁オ | 1行目  | 2巻103頁 | 87頁 3行目 | 47頁 6行目 |    |

※1 これより『微意』上巻、『増註』上巻、『大成』巻一。

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番 | 巻名  | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考 |
|----|-----|------|------|--------|----------|----------|----|
| 18 | 帚木  | 16丁ウ | 7行目  | 2巻104頁 | 88頁 4行目  | 48頁 2行目  |    |
| 19 | 帚木  | 24丁ウ | 12行目 | 2巻120頁 | 104頁 2行目 | 55頁11行目  |    |
| 20 | 帚木  | 39丁オ | 6行目  | 2巻149頁 | 127頁 9行目 | 68頁 8行目  |    |
| 21 | 帚木  | 39丁オ | 11行目 | 2巻149頁 | 127頁12行目 | 68頁11行目  |    |
| 22 | 帚木  | 42丁ウ | 4行目  | 2巻156頁 | 132頁 5行目 | 71頁10行目  |    |
| 23 | 空蟬  | 3丁ウ  | 11行目 | 2巻182頁 | 148頁 5行目 | 86頁13行目  |    |
| 24 | 空蟬  | 4丁オ  | 5行目  | 2巻183頁 | 148頁 9行目 | 87頁 2行目  |    |
| 25 | 空蟬  | 11丁オ | 3行目  | 2巻197頁 | 157頁12行目 | 93頁 7行目  |    |
| 26 | 夕顔  | 8丁オ  | 11行目 | 2巻219頁 | 171頁11行目 | 106頁 9行目 |    |
| 27 | 夕顔  | 10丁オ | 12行目 | 2巻223頁 | 174頁12行目 | 108頁 8行目 |    |
| 28 | 夕顔  | 11丁ウ | 4行目  | 2巻226頁 | 176頁10行目 | 109頁10行目 |    |
| 29 | 夕顔  | 12丁ウ | 2行目  | 2巻228頁 | 178頁 7行目 | 110頁 9行目 |    |
| 30 | 夕顔  | 27丁ウ | 1行目  | 2巻258頁 | 199頁 6行目 | 123頁 8行目 |    |
| 31 | 夕顔  | 28丁ウ | 3行目  | 2巻260頁 | 200頁10行目 | 124頁 8行目 |    |
| 32 | 夕顔  | 40丁ウ | 1行目  | 2巻284頁 | 215頁 4行目 | 135頁 5行目 |    |
| 33 | 夕顔  | 52丁ウ | 4行目  | 2巻308頁 | 234頁 4行目 | 146頁 1行目 |    |
| 34 | 若紫  | 4丁ウ  | 3行目  | 2巻322頁 | 240頁 9行目 | 153頁 2行目 |    |
| 35 | 若紫  | 20丁オ | 8行目  | 2巻353頁 | 264頁12行目 | 167頁 4行目 |    |
| 36 | 若紫  | 21丁ウ | 9行目  | 2巻356頁 | 267頁 6行目 | 168頁 9行目 |    |
| 37 | 若紫  | 27丁ウ | 1行目  | 2巻368頁 | 275頁 6行目 | 173頁 9行目 |    |
| 38 | 若紫  | 49丁オ | 11行目 | 2巻411頁 | 304頁 8行目 | 192頁 9行目 |    |
| 39 | 末摘花 | 2丁オ  | 7行目  | 3巻 7頁  | 312頁 5行目 | 201頁 4行目 |    |
| 40 | 末摘花 | 8丁ウ  | 2行目  | 3巻 20頁 | 321頁 5行目 | 206頁 6行目 |    |
| 41 | 末摘花 | 11丁ウ | 2行目  | 3巻 26頁 | 325頁 6行目 | 208頁12行目 |    |
| 42 | 末摘花 | 29丁オ | 6行目  | 3巻 61頁 | 349頁 5行目 | 224頁 6行目 |    |
| 43 | 末摘花 | 29丁ウ | 3行目  | 3巻 62頁 | 349頁10行目 | 224頁10行目 |    |
| 44 | 紅葉賀 | 4丁オ  | 6行目  | 3巻 87頁 | 367頁 5行目 | 238頁11行目 |    |
| 45 | 紅葉賀 | 11丁オ | 12行目 | 3巻101頁 | 376頁 1行目 | 245頁 1行目 |    |
| 46 | 紅葉賀 | 12丁オ | 2行目  | 3巻103頁 | 377頁 1行目 | 245頁 8行目 |    |
| 47 | 紅葉賀 | 14丁オ | 12行目 | 3巻107頁 | 380頁 6行目 | 247頁11行目 |    |
| 48 | 紅葉賀 | 16丁ウ | 7行目  | 3巻112頁 | 383頁 8行目 | 249頁13行目 |    |
| 49 | 紅葉賀 | 18丁ウ | 8行目  | 3巻116頁 | 386頁 2行目 | 251頁10行目 |    |

| 項番 | 巻名  | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考    |
|----|-----|------|------|--------|----------|----------|-------|
| 50 | 紅葉賀 | 21丁オ | 2行目  | 3巻121頁 | 388頁12行目 | 253頁 8行目 | ※2    |
| 51 | 紅葉賀 | 21丁ウ | 1行目  | 3巻122頁 | 389頁 6行目 | 253頁12行目 |       |
| 52 | 紅葉賀 | 22丁オ | 1行目  | 3巻123頁 | 390頁 1行目 | 254頁 4行目 |       |
| 53 | 紅葉賀 | 28丁オ | 1行目  | 3巻135頁 | 398頁11行目 | 259頁 3行目 |       |
| 54 | 紅葉賀 | 31丁オ | 10行目 | 3巻141頁 | 403頁10行目 | 262頁 1行目 |       |
| 55 | 花宴  | 4丁ウ  | 1行目  | 3巻156頁 | 410頁 7行目 | 270頁12行目 |       |
| 56 | 花宴  | 4丁ウ  | 10行目 | 3巻156頁 | 411頁 5行目 | 271頁 3行目 |       |
| 57 | 花宴  | 4丁ウ  | 11行目 | 3巻156頁 | 411頁 6行目 | 271頁 4行目 |       |
| 58 | 花宴  | 5丁オ  | 9行目  | 3巻157頁 | 411頁12行目 | 271頁 9行目 |       |
| 59 | 花宴  | 13丁オ | 4行目  | 3巻173頁 | 422頁10行目 | 277頁 9行目 |       |
| 60 | 葵   | 3丁ウ  | 4行目  | 3巻186頁 | 429頁 4行目 | 284頁 1行目 |       |
| 61 | 葵   | 4丁オ  | 10行目 | 3巻187頁 | 430頁 3行目 | 284頁11行目 |       |
| 62 | 葵   | 6丁ウ  | 12行目 | 3巻192頁 | 433頁10行目 | 286頁13行目 |       |
| 63 | 葵   | 7丁オ  | 6行目  | 3巻193頁 | 434頁 2行目 | 287頁 3行目 |       |
| 64 | 葵   | 7丁オ  | 9行目  | 3巻193頁 | 434頁 4行目 | 287頁 4行目 |       |
| 65 | 葵   | 10丁ウ | 4行目  | 3巻200頁 | 438頁11行目 | 289頁11行目 |       |
| 66 | 葵   | 15丁ウ | 12行目 | 3巻210頁 | 446頁 6行目 | 294頁 9行目 | 67と転倒 |
| 67 | 葵   | 14丁ウ | 1行目  | 3巻208頁 | 444頁 3行目 | 293頁 3行目 | 66と転倒 |
| 68 | 葵   | 17丁ウ | 3行目  | 3巻214頁 | 448頁 9行目 | 296頁 3行目 |       |
| 69 | 葵   | 25丁オ | 8行目  | 3巻229頁 | 458頁 7行目 | 303頁 5行目 |       |
| 70 | 葵   | 30丁ウ | 9行目  | 3巻240頁 | 465頁 7行目 | 308頁 4行目 |       |
| 71 | 葵   | 45丁ウ | 12行目 | 3巻270頁 | 484頁 3行目 | 320頁10行目 |       |
| 72 | 柿   | 2丁オ  | 5行目  | 3巻291頁 | 494頁 3行目 | 333頁 3行目 |       |
| 73 | 柿   | 12丁オ | 5行目  | 3巻311頁 | 507頁 6行目 | 341頁 8行目 |       |
| 74 | 柿   | 12丁ウ | 4行目  | 3巻312頁 | 508頁 1行目 | 341頁14行目 |       |
| 75 | 柿   | 13丁ウ | 6行目  | 3巻314頁 | 509頁 5行目 | 342頁14行目 |       |
| 76 | 柿   | 14丁オ | 2行目  | 3巻315頁 | 509頁10行目 | 343頁 4行目 |       |
| 77 | 柿   | 16丁ウ | 9行目  | 3巻320頁 | 513頁 5行目 | 345頁12行目 |       |
| 78 | 柿   | 17丁オ | 9行目  | 3巻321頁 | 513頁12行目 | 346頁 4行目 |       |
| 79 | 柿   | 18丁オ | 6行目  | 3巻323頁 | 514頁12行目 | 347頁 1行目 |       |
| 80 | 柿   | 21丁オ | 8行目  | 3巻329頁 | 519頁 2行目 | 349頁 5行目 |       |
| 81 | 柿   | 22丁オ | 1行目  | 3巻331頁 | 519頁12行目 | 349頁13行目 |       |

※2 『大成』の主底本（大島本）は対応本文を有さない。

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番  | 巻名  | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考    |
|-----|-----|------|------|--------|----------|----------|-------|
| 82  | 柿   | 27丁ウ | 1行目  | 3巻342頁 | 526頁 3行目 | 354頁 8行目 |       |
| 83  | 柿   | 32丁ウ | 5行目  | 3巻352頁 | 532頁11行目 | 358頁14行目 |       |
| 84  | 柿   | 35丁オ | 12行目 | 3巻357頁 | 535頁12行目 | 361頁 5行目 |       |
| 85  | 柿   | 36丁ウ | 4行目  | 3巻360頁 | 537頁10行目 | 362頁 6行目 |       |
| 86  | 柿   | 39丁オ | 4行目  | 3巻365頁 | 541頁 4行目 | 364頁 9行目 |       |
| 87  | 柿   | 48丁オ | 10行目 | 3巻383頁 | 551頁12行目 | 372頁 5行目 |       |
| 88  | 柿   | 51丁オ | 2行目  | 3巻389頁 | 555頁 2行目 | 374頁 9行目 |       |
| 89  | 柿   | 51丁ウ | 4行目  | 3巻390頁 | 555頁 8行目 | 374頁14行目 |       |
| 90  | 花散里 | 3丁ウ  | 11行目 | 3巻412頁 | 565頁 7行目 | 388頁12行目 |       |
| 91  | 須磨  | 5丁ウ  | 1行目  | 4巻 14頁 | 574頁 3行目 | 397頁13行目 |       |
| 92  | 須磨  | 16丁ウ | 9行目  | 4巻 36頁 | 588頁 5行目 | 408頁 2行目 | 93と転倒 |
| 93  | 須磨  | 11丁ウ | 11行目 | 4巻 26頁 | 582頁 2行目 | 403頁 8行目 | 92と転倒 |
| 94  | 須磨  | 42丁ウ | 9行目  | 4巻 88頁 | 622頁 4行目 | 430頁 1行目 |       |
| 95  | 明石  | 2丁オ  | 7行目  | 4巻111頁 | 634頁 4行目 | 441頁 4行目 |       |
| 96  | 明石  | 9丁オ  | 10行目 | 4巻125頁 | 642頁11行目 | 447頁 2行目 |       |
| 97  | 明石  | 12丁オ | 9行目  | 4巻131頁 | 646頁 6行目 | 449頁 8行目 |       |
| 98  | 明石  | 26丁ウ | 3行目  | 4巻160頁 | 663頁 3行目 | 460頁13行目 |       |
| 99  | 明石  | 27丁オ | 1行目  | 4巻161頁 | 663頁 8行目 | 461頁 3行目 |       |
| 100 | 明石  | 27丁オ | 5行目  | 4巻161頁 | 663頁10行目 | 461頁 5行目 |       |
| 101 | 明石  | 27丁オ | 6行目  | 4巻161頁 | 663頁11行目 | 461頁 6行目 |       |
| 102 | 明石  | 35丁ウ | 11行目 | 4巻178頁 | 675頁 3行目 | 468頁 5行目 |       |
| 103 | 明石  | 43丁ウ | 5行目  | 4巻194頁 | 685頁 2行目 | 475頁 4行目 |       |
| 104 | 明石  | 45丁ウ | 3行目  | 4巻198頁 | 687頁 1行目 | 476頁11行目 |       |
| 105 | 冷標  | 4丁オ  | 3行目  | 4巻213頁 | 4頁 3行目   | 484頁10行目 | ※3    |
| 106 | 冷標  | 4丁ウ  | 6行目  | 4巻214頁 | 5頁 5行目   | 485頁 4行目 |       |
| 107 | 冷標  | 6丁オ  | 2行目  | 4巻217頁 | 6頁12行目   | 486頁 2行目 |       |
| 108 | 冷標  | 6丁ウ  | 9行目  | 4巻218頁 | 7頁12行目   | 486頁12行目 |       |
| 109 | 冷標  | 9丁オ  | 2行目  | 4巻223頁 | 10頁 7行目  | 488頁 9行目 |       |
| 110 | 冷標  | 9丁ウ  | 10行目 | 4巻224頁 | 11頁 8行目  | 489頁 4行目 |       |
| 111 | 冷標  | 11丁オ | 11行目 | 4巻227頁 | 13頁10行目  | 490頁12行目 |       |
| 112 | 冷標  | 14丁ウ | 3行目  | 4巻234頁 | 18頁 1行目  | 493頁 8行目 |       |
| 113 | 冷標  | 18丁オ | 12行目 | 4巻241頁 | 22頁12行目  | 496頁14行目 |       |

※3 これより『増註』中巻。

| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考 |
|-----|----|------|------|--------|----------|----------|----|
| 114 | 冷標 | 20丁ウ | 4行目  | 4巻246頁 | 25頁 7行目  | 498頁11行目 |    |
| 115 | 冷標 | 26丁ウ | 6行目  | 4巻258頁 | 34頁 2行目  | 503頁 9行目 |    |
| 116 | 蓬生 | 4丁ウ  | 3行目  | 4巻294頁 | 54頁 3行目  | 521頁 4行目 |    |
| 117 | 蓬生 | 5丁オ  | 7行目  | 4巻295頁 | 55頁 1行目  | 521頁13行目 |    |
| 118 | 蓬生 | 9丁オ  | 4行目  | 4巻303頁 | 59頁 9行目  | 525頁 6行目 |    |
| 119 | 蓬生 | 11丁オ | 7行目  | 4巻307頁 | 62頁 4行目  | 527頁 5行目 |    |
| 120 | 蓬生 | 12丁ウ | 2行目  | 4巻310頁 | 63頁10行目  | 528頁 7行目 |    |
| 121 | 蓬生 | 14丁オ | 4行目  | 4巻313頁 | 65頁 9行目  | 529頁12行目 |    |
| 122 | 蓬生 | 25丁オ | 11行目 | 4巻335頁 | 79頁 7行目  | 540頁 1行目 |    |
| 123 | 蓬生 | 26丁オ | 9行目  | 4巻337頁 | 80頁 8行目  | 540頁13行目 |    |
| 124 | 関屋 | 4丁オ  | 3行目  | 4巻349頁 | 84頁 9行目  | 548頁12行目 |    |
| 125 | 関屋 | 5丁オ  | 9行目  | 4巻351頁 | 86頁 4行目  | 549頁13行目 |    |
| 126 | 関屋 | 6丁ウ  | 4行目  | 4巻354頁 | 87頁10行目  | 551頁 1行目 |    |
| 127 | 関屋 | 7丁オ  | 4行目  | 4巻355頁 | 88頁 4行目  | 551頁 6行目 |    |
| 128 | 絵合 | 6丁ウ  | 1行目  | 4巻372頁 | 95頁10行目  | 560頁11行目 |    |
| 129 | 絵合 | 7丁オ  | 4行目  | 4巻373頁 | 96頁 7行目  | 561頁 5行目 |    |
| 130 | 絵合 | 8丁ウ  | 3行目  | 4巻376頁 | 98頁 8行目  | 562頁 9行目 |    |
| 131 | 絵合 | 9丁オ  | 3行目  | 4巻377頁 | 99頁 3行目  | 563頁 1行目 |    |
| 132 | 絵合 | 23丁オ | 2行目  | 4巻405頁 | 116頁10行目 | 574頁 3行目 |    |
| 133 | 絵合 | 23丁オ | 5行目  | 4巻405頁 | 116頁12行目 | 574頁 5行目 |    |
| 134 | 松風 | 2丁ウ  | 8行目  | 4巻414頁 | 120頁12行目 | 579頁11行目 |    |
| 135 | 松風 | 15丁ウ | 3行目  | 4巻440頁 | 137頁 2行目 | 590頁 3行目 |    |
| 136 | 松風 | 16丁ウ | 4行目  | 4巻442頁 | 138頁 8行目 | 591頁 3行目 |    |
| 137 | 薄雲 | 4丁オ  | 1行目  | 5巻 11頁 | 154頁 7行目 | 604頁 9行目 |    |
| 138 | 薄雲 | 14丁ウ | 4行目  | 5巻 32頁 | 167頁 7行目 | 613頁 3行目 |    |
| 139 | 薄雲 | 15丁オ | 10行目 | 5巻 33頁 | 168頁 5行目 | 613頁11行目 |    |
| 140 | 薄雲 | 16丁オ | 4行目  | 5巻 35頁 | 169頁 4行目 | 614頁 6行目 |    |
| 141 | 薄雲 | 27丁オ | 4行目  | 5巻 57頁 | 181頁 6行目 | 623頁 8行目 |    |
| 142 | 薄雲 | 27丁ウ | 4行目  | 5巻 58頁 | 182頁 1行目 | 623頁13行目 |    |
| 143 | 薄雲 | 30丁オ | 9行目  | 5巻 63頁 | 184頁12行目 | 626頁 1行目 |    |
| 144 | 薄雲 | 33丁オ | 10行目 | 5巻 69頁 | 188頁 4行目 | 628頁 9行目 |    |
| 145 | 薄雲 | 33丁ウ | 4行目  | 5巻 70頁 | 188頁 7行目 | 628頁12行目 |    |
| 146 | 薄雲 | 33丁ウ | 9行目  | 5巻 70頁 | 189頁 3行目 | 628頁14行目 |    |

| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考 |
|-----|----|------|------|--------|----------|----------|----|
| 147 | 朝顔 | 2丁オ  | 4行目  | 5巻 85頁 | 196頁 2行目 | 639頁 2行目 |    |
| 148 | 朝顔 | 14丁オ | 5行目  | 5巻109頁 | 211頁11行目 | 649頁 5行目 |    |
| 149 | 朝顔 | 22丁ウ | 6行目  | 5巻126頁 | 222頁 3行目 | 656頁 3行目 |    |
| 150 | 朝顔 | 24丁オ | 3行目  | 5巻129頁 | 224頁 2行目 | 657頁 6行目 |    |
| 151 | 乙女 |      |      |        |          |          | ※4 |
| 152 | 乙女 | 6丁オ  | 10行目 | 5巻147頁 | 233頁 6行目 | 668頁10行目 |    |
| 153 | 乙女 | 7丁ウ  | 8行目  | 5巻150頁 | 235頁 5行目 | 669頁13行目 |    |
| 154 | 乙女 | 11丁オ | 8行目  | 5巻157頁 | 240頁 3行目 | 672頁11行目 |    |
| 155 | 乙女 | 11丁ウ | 6行目  | 5巻158頁 | 240頁 8行目 | 673頁 2行目 |    |
| 156 | 乙女 | 13丁ウ | 9行目  | 5巻162頁 | 243頁 1行目 | 674頁13行目 |    |
| 157 | 乙女 | 14丁ウ | 4行目  | 5巻164頁 | 244頁 5行目 | 675頁 9行目 |    |
| 158 | 乙女 | 14丁ウ | 6行目  | 5巻164頁 | 244頁 6行目 | 675頁10行目 |    |
| 159 | 乙女 | 16丁オ | 3行目  | 5巻167頁 | 245頁10行目 | 676頁10行目 |    |
| 160 | 乙女 | 20丁ウ | 9行目  | 5巻176頁 | 251頁 5行目 | 680頁11行目 |    |
| 161 | 乙女 | 21丁ウ | 3行目  | 5巻178頁 | 252頁 3行目 | 681頁 6行目 |    |
| 162 | 乙女 | 22丁オ | 11行目 | 5巻179頁 | 253頁 2行目 | 682頁 2行目 |    |
| 163 | 乙女 | 22丁ウ | 6行目  | 5巻180頁 | 253頁 6行目 | 682頁 6行目 |    |
| 164 | 乙女 | 23丁オ | 2行目  | 5巻181頁 | 253頁10行目 | 682頁10行目 |    |
| 165 | 乙女 | 23丁オ | 7行目  | 5巻181頁 | 254頁 1行目 | 682頁12行目 |    |
| 166 | 乙女 | 23丁ウ | 2行目  | 5巻182頁 | 254頁 5行目 | 683頁 2行目 |    |
| 167 | 乙女 | 25丁ウ | 12行目 | 5巻186頁 | 257頁 2行目 | 685頁 5行目 |    |
| 168 | 乙女 | 26丁オ | 6行目  | 5巻187頁 | 257頁 6行目 | 685頁 8行目 |    |
| 169 | 乙女 | 26丁ウ | 2行目  | 5巻188頁 | 257頁11行目 | 685頁12行目 |    |
| 170 | 乙女 | 30丁オ | 6行目  | 5巻195頁 | 262頁 2行目 | 689頁 3行目 |    |
| 171 | 乙女 | 30丁ウ | 8行目  | 5巻196頁 | 262頁10行目 | 689頁10行目 |    |
| 172 | 乙女 | 35丁オ | 6行目  | 5巻205頁 | 267頁11行目 | 693頁10行目 |    |
| 173 | 乙女 | 38丁ウ | 7行目  | 5巻212頁 | 272頁 4行目 | 696頁13行目 |    |
| 174 | 乙女 | 47丁ウ | 3行目  | 5巻230頁 | 282頁 2行目 | 704頁 7行目 |    |
| 175 | 乙女 | 49丁オ | 11行目 | 5巻233頁 | 284頁10行目 | 705頁14行目 |    |
| 176 | 乙女 | 50丁オ | 4行目  | 5巻235頁 | 285頁 7行目 | 706頁 8行目 |    |
| 177 | 乙女 | 51丁オ | 9行目  | 5巻237頁 | 286頁12行目 | 707頁 9行目 |    |
| 178 | 乙女 | 54丁オ | 1行目  | 5巻243頁 | 289頁11行目 | 709頁13行目 |    |

※4 これより『微意』中巻。



| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考 |
|-----|----|------|------|--------|----------|----------|----|
| 179 | 乙女 | 54丁オ | 4行目  | 5巻243頁 | 290頁 1行目 | 710頁 1行目 |    |
| 180 | 乙女 | 55丁ウ | 1行目  | 5巻246頁 | 291頁 7行目 | 711頁 4行目 |    |
| 181 | 乙女 | 56丁オ | 9行目  | 5巻247頁 | 292頁 9行目 | 712頁 1行目 |    |
| 182 | 玉鬘 |      |      |        |          |          | ※5 |
| 183 | 玉鬘 | 6丁ウ  | 8行目  | 5巻264頁 | 303頁10行目 | 722頁 4行目 |    |
| 184 | 玉鬘 | 16丁ウ | 12行目 | 5巻284頁 | 316頁 2行目 | 730頁12行目 |    |
| 185 | 玉鬘 | 30丁オ | 6行目  | 5巻311頁 | 331頁 8行目 | 742頁 4行目 |    |
| 186 | 玉鬘 | 30丁ウ | 10行目 | 5巻312頁 | 332頁 4行目 | 742頁12行目 |    |
| 187 | 玉鬘 | 31丁オ | 7行目  | 5巻313頁 | 332頁 9行目 | 743頁 2行目 |    |
| 188 | 玉鬘 | 32丁オ | 2行目  | 5巻315頁 | 333頁 8行目 | 743頁12行目 |    |
| 189 | 玉鬘 | 35丁ウ | 8行目  | 5巻322頁 | 338頁 2行目 | 746頁14行目 |    |
| 190 | 玉鬘 | 36丁オ | 9行目  | 5巻323頁 | 339頁 1行目 | 747頁 7行目 |    |
| 191 | 玉鬘 | 37丁オ | 8行目  | 5巻325頁 | 339頁12行目 | 748頁 3行目 |    |
| 192 | 玉鬘 | 38丁ウ | 12行目 | 5巻328頁 | 341頁10行目 | 749頁 8行目 |    |
| 193 | 玉鬘 | 42丁オ | 6行目  | 5巻335頁 | 345頁 6行目 | 752頁 3行目 |    |
| 194 | 玉鬘 | 42丁ウ | 3行目  | 5巻336頁 | 345頁11行目 | 752頁 7行目 |    |
| 195 | 玉鬘 | 45丁ウ | 7行目  | 5巻342頁 | 349頁 4行目 | 754頁13行目 |    |
| 196 | 玉鬘 | 46丁ウ | 2行目  | 5巻344頁 | 350頁 6行目 | 755頁 8行目 |    |
| 197 | 初音 |      |      |        |          |          |    |
| 198 | 初音 | 7丁ウ  | 6行目  | 5巻366頁 | 363頁 3行目 | 767頁 9行目 |    |
| 199 | 初音 | 8丁ウ  | 4行目  | 5巻368頁 | 364頁 6行目 | 768頁 7行目 |    |
| 200 | 初音 | 18丁ウ | 7行目  | 5巻388頁 | 376頁 8行目 | 776頁 4行目 |    |
| 201 | 初音 | 18丁ウ | 8行目  | 5巻388頁 | 376頁 9行目 | 776頁 5行目 |    |
| 202 | 胡蝶 |      |      |        |          |          |    |
| 203 | 胡蝶 | 10丁ウ | 5行目  | 5巻414頁 | 391頁 3行目 | 787頁14行目 |    |
| 204 | 胡蝶 | 13丁ウ | 5行目  | 5巻420頁 | 394頁 7行目 | 790頁 8行目 |    |
| 205 | 胡蝶 | 19丁オ | 9行目  | 5巻431頁 | 401頁 5行目 | 795頁 4行目 |    |
| 206 | 胡蝶 | 20丁ウ | 6行目  | 5巻434頁 | 402頁12行目 | 796頁 7行目 |    |
| 207 | 胡蝶 | 21丁ウ | 10行目 | 5巻436頁 | 404頁 5行目 | 797頁 8行目 |    |
| 208 | 胡蝶 | 24丁ウ | 9行目  | 5巻442頁 | 407頁10行目 | 800頁 4行目 |    |
| 209 | 蛩  | 6丁ウ  | 5行目  | 6巻 16頁 | 415頁 6行目 | 808頁13行目 |    |
| 210 | 蛩  | 8丁ウ  | 6行目  | 6巻 20頁 | 418頁 1行目 | 810頁 7行目 |    |

※5 これより『大成』巻二。

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成       | 備考     |
|-----|----|------|------|--------|----------|----------|--------|
| 211 | 蛭  | 9丁オ  | 10行目 | 6巻 21頁 | 418頁10行目 | 811頁 2行目 | 212と転倒 |
| 212 | 蛭  | 9丁オ  | 6行目  | 6巻 21頁 | 418頁 8行目 | 810頁14行目 | 211と転倒 |
| 213 | 蛭  | 13丁ウ | 7行目  | 6巻 30頁 | 424頁 2行目 | 814頁 7行目 |        |
| 214 | 蛭  | 15丁ウ | 12行目 | 6巻 34頁 | 426頁11行目 | 816頁 3行目 |        |
| 215 | 蛭  | 19丁オ | 2行目  | 6巻 41頁 | 431頁 5行目 | 818頁 3行目 |        |
| 216 | 蛭  | 20丁ウ | 5行目  | 6巻 44頁 | 433頁 7行目 | 819頁 6行目 |        |
| 217 | 蛭  | 20丁ウ | 6行目  | 6巻 44頁 | 433頁 8行目 | 819頁 6行目 |        |
| 218 | 蛭  | 20丁ウ | 11行目 | 6巻 44頁 | 434頁 1行目 | 819頁 9行目 |        |
| 219 | 蛭  | 24丁ウ | 9行目  | 6巻 52頁 | 438頁 7行目 | 822頁 9行目 |        |
| 220 | 常夏 | 4丁ウ  | 1行目  | 6巻 68頁 | 445頁 2行目 | 830頁14行目 |        |
| 221 | 常夏 | 7丁ウ  | 7行目  | 6巻 74頁 | 448頁 8行目 | 833頁 9行目 |        |
| 222 | 常夏 | 13丁ウ | 11行目 | 6巻 86頁 | 456頁 6行目 | 838頁 6行目 |        |
| 223 | 常夏 | 16丁オ | 2行目  | 6巻 91頁 | 458頁10行目 | 840頁 2行目 |        |
| 224 | 常夏 | 24丁オ | 4行目  | 6巻107頁 | 468頁10行目 | 846頁13行目 |        |
| 225 | 篝火 | 2丁オ  | 3行目  | 6巻121頁 | 476頁 2行目 | 855頁 2行目 |        |
| 226 | 篝火 | 3丁オ  | 6行目  | 6巻123頁 | 477頁 4行目 | 856頁 1行目 |        |
| 227 | 野分 | 4丁オ  | 4行目  | 6巻135頁 | 484頁 5行目 | 864頁 9行目 |        |
| 228 | 野分 | 6丁オ  | 2行目  | 6巻139頁 | 486頁 6行目 | 866頁 3行目 |        |
| 229 | 野分 | 6丁オ  | 5行目  | 6巻139頁 | 486頁 8行目 | 866頁 4行目 |        |
| 230 | 野分 | 6丁オ  | 12行目 | 6巻139頁 | 487頁 4行目 | 866頁 8行目 |        |
| 231 | 野分 | 7丁オ  | 11行目 | 6巻141頁 | 488頁 3行目 | 867頁 5行目 |        |
| 232 | 野分 | 9丁ウ  | 10行目 | 6巻146頁 | 490頁12行目 | 869頁 6行目 |        |
| 233 | 野分 | 11丁ウ | 7行目  | 6巻150頁 | 493頁 6行目 | 871頁 1行目 |        |
| 234 | 野分 | 14丁ウ | 6行目  | 6巻156頁 | 496頁 7行目 | 873頁 5行目 |        |
| 235 | 野分 | 16丁オ | 5行目  | 6巻159頁 | 498頁 5行目 | 874頁 8行目 |        |
| 236 | 野分 | 17丁ウ | 10行目 | 6巻162頁 | 500頁 6行目 | 875頁12行目 |        |
| 237 | 行幸 |      |      |        |          |          |        |
| 238 | 行幸 | 2丁オ  | 9行目  | 6巻179頁 | 508頁 6行目 | 885頁 5行目 |        |
| 239 | 行幸 | 4丁ウ  | 10行目 | 6巻184頁 | 511頁 9行目 | 887頁 4行目 |        |
| 240 | 行幸 | 6丁オ  | 10行目 | 6巻187頁 | 513頁11行目 | 888頁 7行目 |        |
| 241 | 行幸 | 8丁ウ  | 9行目  | 6巻192頁 | 517頁 1行目 | 890頁 6行目 |        |
| 242 | 行幸 | 10丁オ | 10行目 | 6巻195頁 | 518頁10行目 | 891頁12行目 |        |
| 243 | 行幸 | 11丁ウ | 4行目  | 6巻198頁 | 520頁 5行目 | 893頁 1行目 |        |

| 項番  | 巻名  | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成        | 備考 |
|-----|-----|------|------|--------|----------|-----------|----|
| 244 | 行幸  | 12丁オ | 7行目  | 6巻199頁 | 521頁 4行目 | 893頁10行目  |    |
| 245 | 行幸  | 21丁オ | 5行目  | 6巻217頁 | 532頁 2行目 | 901頁13行目  |    |
| 246 | 行幸  | 24丁オ | 7行目  | 6巻223頁 | 536頁 1行目 | 904頁13行目  |    |
| 247 | 行幸  | 27丁ウ | 9行目  | 6巻230頁 | 540頁 7行目 | 908頁 4行目  |    |
| 248 | 藤袴  | 6丁オ  | 4行目  | 6巻253頁 | 551頁 4行目 | 920頁 9行目  |    |
| 249 | 藤袴  | 7丁ウ  | 1行目  | 6巻256頁 | 553頁 5行目 | 921頁 8行目  |    |
| 250 | 藤袴  | 8丁オ  | 2行目  | 6巻257頁 | 554頁 1行目 | 922頁 1行目  |    |
| 251 | 藤袴  | 9丁ウ  | 5行目  | 6巻260頁 | 555頁12行目 | 923頁 7行目  |    |
| 252 | 藤袴  | 11丁オ | 1行目  | 6巻263頁 | 557頁 6行目 | 924頁 6行目  |    |
| 253 | 藤袴  | 15丁ウ | 12行目 | 6巻272頁 | 563頁10行目 | 928頁11行目  |    |
| 254 | 藤袴  | 17丁ウ | 1行目  | 6巻276頁 | 565頁12行目 | 930頁 5行目  |    |
| 255 | 真木柱 |      |      |        |          |           |    |
| 256 | 真木柱 | 2丁オ  | 3行目  | 6巻283頁 | 568頁 2行目 | 935頁 2行目  |    |
| 257 | 真木柱 | 9丁オ  | 5行目  | 6巻297頁 | 576頁 8行目 | 941頁 1行目  |    |
| 258 | 真木柱 | 23丁ウ | 7行目  | 6巻326頁 | 594頁 2行目 | 953頁11行目  |    |
| 259 | 真木柱 | 26丁ウ | 3行目  | 6巻332頁 | 597頁 7行目 | 956頁 6行目  |    |
| 260 | 真木柱 | 31丁ウ | 4行目  | 6巻342頁 | 603頁11行目 | 960頁13行目  |    |
| 261 | 真木柱 | 33丁オ | 2行目  | 6巻345頁 | 605頁 7行目 | 962頁 3行目  |    |
| 262 | 真木柱 | 40丁ウ | 1行目  | 6巻360頁 | 614頁12行目 | 968頁11行目  |    |
| 263 | 真木柱 | 40丁ウ | 11行目 | 6巻360頁 | 615頁 5行目 | 969頁 2行目  |    |
| 264 | 梅枝  | 2丁ウ  | 5行目  | 6巻370頁 | 618頁10行目 | 975頁10行目  |    |
| 265 | 梅枝  | 19丁オ | 3行目  | 6巻403頁 | 639頁11行目 | 989頁 8行目  |    |
| 266 | 梅枝  | 19丁ウ | 10行目 | 6巻404頁 | 640頁10行目 | 990頁 4行目  |    |
| 267 | 梅枝  | 20丁オ | 7行目  | 6巻405頁 | 641頁 3行目 | 990頁 9行目  |    |
| 268 | 梅枝  | 21丁ウ | 7行目  | 6巻408頁 | 642頁11行目 | 991頁13行目  |    |
| 269 | 梅枝  | 22丁オ | 1行目  | 6巻409頁 | 643頁 3行目 | 992頁 2行目  |    |
| 270 | 藤裏葉 | 3丁ウ  | 10行目 | 6巻420頁 | 648頁 3行目 | 998頁11行目  |    |
| 271 | 藤裏葉 | 5丁オ  | 8行目  | 6巻423頁 | 650頁 2行目 | 1000頁 2行目 |    |
| 272 | 藤裏葉 | 6丁オ  | 11行目 | 6巻425頁 | 651頁 5行目 | 1001頁 2行目 |    |
| 273 | 藤裏葉 | 12丁ウ | 8行目  | 6巻438頁 | 659頁 7行目 | 1006頁 2行目 |    |
| 274 | 藤裏葉 | 14丁オ | 4行目  | 6巻441頁 | 661頁 4行目 | 1007頁 5行目 |    |
| 275 | 藤裏葉 | 14丁ウ | 1行目  | 6巻442頁 | 661頁 8行目 | 1007頁 8行目 |    |
| 276 | 藤裏葉 | 16丁ウ | 9行目  | 6巻446頁 | 664頁 7行目 | 1009頁10行目 |    |

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番  | 巻名  | 湖月抄   | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成        | 備考 |
|-----|-----|-------|------|--------|----------|-----------|----|
| 277 | 藤裏葉 | 21丁ウ  | 8行目  | 6巻456頁 | 670頁10行目 | 1013頁13行目 |    |
| 278 | 藤裏葉 | 24丁ウ  | 12行目 | 6巻462頁 | 675頁 2行目 | 1016頁12行目 |    |
| 279 | 若菜上 | 31丁ウ  | 4行目  | 7巻 66頁 | 717頁 3行目 | 1051頁 1行目 |    |
| 280 | 若菜上 | 32丁ウ  | 11行目 | 7巻 68頁 | 718頁 8行目 | 1052頁 3行目 |    |
| 281 | 若菜上 | 32丁ウ  | 12行目 | 7巻 68頁 | 718頁 8行目 | 1052頁 3行目 |    |
| 282 | 若菜上 | 33丁ウ  | 1行目  | 7巻 70頁 | 719頁 4行目 | 1052頁 9行目 |    |
| 283 | 若菜上 | 40丁オ  | 8行目  | 7巻 83頁 | 727頁 9行目 | 1058頁 9行目 |    |
| 284 | 若菜上 | 47丁ウ  | 1行目  | 7巻 98頁 | 736頁10行目 | 1065頁 3行目 |    |
| 285 | 若菜上 | 48丁ウ  | 12行目 | 7巻100頁 | 738頁 7行目 | 1066頁 7行目 |    |
| 286 | 若菜上 | 51丁オ  | 8行目  | 7巻105頁 | 741頁10行目 | 1068頁10行目 |    |
| 287 | 若菜上 | 56丁オ  | 2行目  | 7巻115頁 | 747頁 6行目 | 1072頁14行目 |    |
| 288 | 若菜上 | 57丁オ  | 1行目  | 7巻117頁 | 749頁 1行目 | 1073頁14行目 |    |
| 289 | 若菜上 | 62丁ウ  | 11行目 | 7巻128頁 | 756頁 6行目 | 1079頁 7行目 |    |
| 290 | 若菜上 | 63丁オ  | 3行目  | 7巻129頁 | 756頁 8行目 | 1079頁 9行目 |    |
| 291 | 若菜上 | 79丁ウ  | 4行目  | 7巻162頁 | 776頁11行目 | 1094頁10行目 |    |
| 292 | 若菜上 | 85丁オ  | 11行目 | 7巻173頁 | 784頁 1行目 | 1099頁 9行目 |    |
| 293 | 若菜上 | 92丁オ  | 2行目  | 7巻187頁 | 792頁 5行目 | 1105頁 9行目 |    |
| 294 | 若菜上 | 92丁オ  | 6行目  | 7巻187頁 | 792頁 7行目 | 1105頁11行目 |    |
| 295 | 若菜上 | 95丁オ  | 1行目  | 7巻193頁 | 795頁 8行目 | 1108頁 1行目 |    |
| 296 | 若菜上 | 96丁オ  | 3行目  | 7巻195頁 | 796頁12行目 | 1109頁 1行目 |    |
| 297 | 若菜上 | 96丁オ  | 4行目  | 7巻195頁 | 797頁 1行目 | 1109頁 1行目 |    |
| 298 | 若菜上 | 98丁オ  | 1行目  | 7巻199頁 | 799頁 5行目 | 1110頁11行目 |    |
| 299 | 若菜上 | 98丁オ  | 11行目 | 7巻199頁 | 799頁12行目 | 1111頁 3行目 |    |
| 300 | 若菜上 | 101丁ウ | 6行目  | 7巻206頁 | 804頁 1行目 | 1114頁 3行目 |    |
| 301 | 若菜上 | 101丁ウ | 11行目 | 7巻206頁 | 804頁 4行目 | 1114頁 6行目 |    |
| 302 | 若菜上 | 107丁ウ | 9行目  | 7巻218頁 | 811頁 9行目 | 1119頁11行目 |    |
| 303 | 若菜下 | 2丁オ   | 5行目  | 7巻227頁 | 817頁 4行目 | 1125頁 3行目 |    |
| 304 | 若菜下 | 3丁オ   | 12行目 | 7巻229頁 | 819頁 1行目 | 1126頁 4行目 |    |
| 305 | 若菜下 | 5丁ウ   | 9行目  | 7巻234頁 | 821頁 9行目 | 1128頁 5行目 |    |
| 306 | 若菜下 | 6丁オ   | 2行目  | 7巻235頁 | 821頁12行目 | 1128頁 7行目 |    |
| 307 | 若菜下 | 15丁オ  | 1行目  | 7巻253頁 | 832頁 6行目 | 1136頁 8行目 |    |
| 308 | 若菜下 | 16丁オ  | 4行目  | 7巻255頁 | 833頁 9行目 | 1137頁 8行目 |    |
| 309 | 若菜下 | 23丁ウ  | 1行目  | 7巻270頁 | 843頁 3行目 | 1144頁 1行目 |    |

| 項番  | 巻名  | 湖月抄   | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成        | 備考 |
|-----|-----|-------|------|--------|----------|-----------|----|
| 310 | 若菜下 | 45丁ウ  | 6行目  | 7巻314頁 | 868頁11行目 | 1163頁 5行目 |    |
| 311 | 若菜下 | 49丁ウ  | 1行目  | 7巻322頁 | 873頁 4行目 | 1166頁11行目 |    |
| 312 | 若菜下 | 59丁ウ  | 1行目  | 7巻342頁 | 884頁11行目 | 1175頁10行目 |    |
| 313 | 若菜下 | 61丁オ  | 3行目  | 7巻345頁 | 886頁 9行目 | 1177頁 1行目 |    |
| 314 | 若菜下 | 62丁ウ  | 10行目 | 7巻348頁 | 888頁 9行目 | 1178頁 9行目 |    |
| 315 | 若菜下 | 65丁ウ  | 2行目  | 7巻354頁 | 892頁 4行目 | 1181頁 2行目 |    |
| 316 | 若菜下 | 67丁ウ  | 10行目 | 7巻358頁 | 894頁11行目 | 1183頁 2行目 |    |
| 317 | 若菜下 | 71丁オ  | 5行目  | 7巻365頁 | 898頁10行目 | 1186頁 2行目 |    |
| 318 | 若菜下 | 72丁オ  | 2行目  | 7巻367頁 | 899頁11行目 | 1186頁13行目 |    |
| 319 | 若菜下 | 75丁オ  | 7行目  | 7巻373頁 | 903頁10行目 | 1189頁13行目 |    |
| 320 | 若菜下 | 76丁ウ  | 1行目  | 7巻376頁 | 905頁 4行目 | 1191頁 1行目 |    |
| 321 | 若菜下 | 79丁ウ  | 3行目  | 7巻382頁 | 909頁 1行目 | 1193頁11行目 |    |
| 322 | 若菜下 | 83丁オ  | 2行目  | 7巻389頁 | 913頁 3行目 | 1196頁12行目 |    |
| 323 | 若菜下 | 86丁オ  | 3行目  | 7巻395頁 | 916頁 9行目 | 1199頁 7行目 |    |
| 324 | 若菜下 | 87丁ウ  | 10行目 | 7巻398頁 | 919頁 3行目 | 1201頁 2行目 |    |
| 325 | 若菜下 | 91丁オ  | 7行目  | 7巻405頁 | 923頁 1行目 | 1204頁 1行目 |    |
| 326 | 若菜下 | 107丁オ | 8行目  | 7巻437頁 | 942頁 2行目 | 1218頁 7行目 |    |
| 327 | 柏木  | 2丁ウ   | 2行目  | 8巻 8頁  | 948頁 8行目 | 1227頁 7行目 |    |
| 328 | 柏木  | 2丁ウ   | 9行目  | 8巻 8頁  | 948頁12行目 | 1227頁11行目 |    |
| 329 | 柏木  | 9丁オ   | 6行目  | 8巻 21頁 | 956頁 3行目 | 1233頁 4行目 |    |
| 330 | 柏木  | 10丁オ  | 8行目  | 8巻 23頁 | 957頁 4行目 | 1234頁 2行目 |    |
| 331 | 柏木  | 23丁オ  | 8行目  | 8巻 49頁 | 971頁10行目 | 1245頁 7行目 |    |
| 332 | 柏木  | 24丁オ  | 2行目  | 8巻 51頁 | 972頁 9行目 | 1246頁 3行目 |    |
| 333 | 柏木  | 35丁オ  | 9行目  | 8巻 73頁 | 985頁 4行目 | 1256頁 2行目 |    |
| 334 | 柏木  | 41丁オ  | 11行目 | 8巻 85頁 | 992頁10行目 | 1261頁 7行目 |    |
| 335 | 横笛  | 3丁オ   | 1行目  | 8巻103頁 | 3頁 2行目   | 1269頁13行目 | ※6 |
| 336 | 横笛  | 7丁オ   | 9行目  | 8巻111頁 | 7頁12行目   | 1273頁 7行目 |    |
| 337 | 横笛  | 10丁オ  | 4行目  | 8巻117頁 | 11頁 1行目  | 1275頁13行目 |    |
| 338 | 横笛  | 10丁ウ  | 4行目  | 8巻118頁 | 11頁10行目  | 1276頁 6行目 |    |
| 339 | 横笛  | 15丁ウ  | 3行目  | 8巻128頁 | 17頁11行目  | 1280頁12行目 |    |
| 340 | 横笛  | 16丁ウ  | 12行目 | 8巻130頁 | 19頁 5行目  | 1281頁14行目 |    |
| 341 | 横笛  | 19丁オ  | 5行目  | 8巻135頁 | 21頁12行目  | 1283頁14行目 |    |

※6 これより『微意』下巻、『増註』下巻。

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成        | 備考 |
|-----|----|------|------|--------|----------|-----------|----|
| 342 | 横笛 | 19丁オ | 10行目 | 8巻135頁 | 22頁 3行目  | 1284頁 2行目 |    |
| 343 | 横笛 | 19丁ウ | 2行目  | 8巻136頁 | 22頁 5行目  | 1284頁 4行目 |    |
| 344 | 横笛 | 21丁ウ | 9行目  | 8巻140頁 | 24頁11行目  | 1286頁 3行目 |    |
| 345 | 鈴虫 | 3丁ウ  | 11行目 | 8巻146頁 | 30頁 3行目  | 1292頁11行目 |    |
| 346 | 鈴虫 | 7丁ウ  | 4行目  | 8巻154頁 | 34頁 8行目  | 1296頁 1行目 |    |
| 347 | 夕霧 | 2丁オ  | 1行目  | 8巻181頁 | 48頁 1行目  | 1309頁 1行目 |    |
| 348 | 夕霧 | 9丁ウ  | 9行目  | 8巻196頁 | 56頁12行目  | 1315頁12行目 |    |
| 349 | 夕霧 | 14丁ウ | 1行目  | 8巻206頁 | 62頁 4行目  | 1319頁13行目 |    |
| 350 | 夕霧 | 19丁オ | 1行目  | 8巻215頁 | 67頁 8行目  | 1323頁11行目 |    |
| 351 | 夕霧 | 19丁オ | 5行目  | 8巻215頁 | 67頁11行目  | 1323頁13行目 |    |
| 352 | 夕霧 | 21丁ウ | 1行目  | 8巻220頁 | 70頁 6行目  | 1325頁13行目 |    |
| 353 | 夕霧 | 35丁ウ | 12行目 | 8巻248頁 | 87頁 1行目  | 1338頁 8行目 |    |
| 354 | 夕霧 | 36丁ウ | 1行目  | 8巻250頁 | 87頁 8行目  | 1339頁 1行目 |    |
| 355 | 夕霧 | 63丁ウ | 11行目 | 8巻304頁 | 119頁 3行目 | 1362頁10行目 |    |
| 356 | 夕霧 | 73丁オ | 11行目 | 8巻323頁 | 129頁12行目 | 1370頁13行目 |    |
| 357 | 夕霧 | 76丁オ | 7行目  | 8巻329頁 | 133頁 2行目 | 1373頁 7行目 |    |
| 358 | 夕霧 | 77丁ウ | 6行目  | 8巻332頁 | 135頁 2行目 | 1374頁12行目 |    |
| 359 | 御法 | 2丁オ  | 1行目  | 8巻341頁 | 138頁 1行目 | 1381頁 1行目 | ※7 |
| 360 | 御法 | 3丁ウ  | 10行目 | 8巻344頁 | 140頁 1行目 | 1382頁 9行目 |    |
| 361 | 御法 | 5丁ウ  | 4行目  | 8巻348頁 | 142頁 2行目 | 1384頁 2行目 |    |
| 362 | 御法 | 7丁ウ  | 3行目  | 8巻352頁 | 144頁 9行目 | 1385頁 9行目 |    |
| 363 | 御法 | 11丁オ | 12行目 | 8巻359頁 | 148頁11行目 | 1388頁14行目 |    |
| 364 | 御法 | 12丁ウ | 3行目  | 8巻362頁 | 150頁 7行目 | 1389頁14行目 |    |
| 365 | 御法 | 15丁ウ | 10行目 | 8巻368頁 | 154頁 3行目 | 1392頁13行目 |    |
| 366 | 御法 | 16丁オ | 5行目  | 8巻369頁 | 154頁 6行目 | 1393頁 2行目 |    |
| 367 | 御法 | 20丁ウ | 6行目  | 8巻378頁 | 159頁12行目 | 1396頁14行目 |    |
| 368 | 御法 | 20丁ウ | 8行目  | 8巻378頁 | 159頁12行目 | 1397頁 1行目 |    |
| 369 | 幻  |      |      |        |          |           |    |
| 370 | 幻  | 18丁ウ | 8行目  | 8巻418頁 | 184頁 4行目 | 1418頁 1行目 |    |
| 371 | 幻  | 23丁オ | 8行目  | 8巻427頁 | 190頁 6行目 | 1422頁 4行目 |    |
| 372 | 幻  | 24丁オ | 7行目  | 8巻429頁 | 191頁 8行目 | 1423頁 1行目 |    |
| 373 | 幻  | 24丁ウ | 4行目  | 8巻430頁 | 192頁 2行目 | 1423頁 6行目 |    |

※7 これより『大成』巻三。

| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成     | 増註       | 大成        | 備考 |
|-----|----|------|------|--------|----------|-----------|----|
| 374 | 雲隠 |      |      |        |          |           |    |
| 375 | 匂宮 |      |      |        |          |           |    |
| 376 | 匂宮 | 2丁オ  | 1行目  | 8巻437頁 | 208頁 1行目 | 1429頁 1行目 |    |
| 377 | 匂宮 | 2丁ウ  | 8行目  | 8巻438頁 | 208頁12行目 | 1429頁11行目 |    |
| 378 | 匂宮 | 3丁ウ  | 2行目  | 8巻440頁 | 209頁 9行目 | 1430頁 5行目 |    |
| 379 | 匂宮 | 4丁ウ  | 8行目  | 8巻442頁 | 211頁 2行目 | 1431頁 6行目 |    |
| 380 | 匂宮 | 7丁オ  | 7行目  | 8巻447頁 | 213頁11行目 | 1433頁 6行目 |    |
| 381 | 匂宮 | 11丁ウ | 3行目  | 8巻456頁 | 219頁 2行目 | 1436頁11行目 |    |
| 382 | 匂宮 | 12丁ウ | 5行目  | 8巻458頁 | 220頁 4行目 | 1437頁 9行目 |    |
| 383 | 紅梅 |      |      |        |          |           |    |
| 384 | 紅梅 | 2丁ウ  | 8行目  | 9巻 8頁  | 229頁12行目 | 1447頁11行目 |    |
| 385 | 紅梅 | 15丁ウ | 6行目  | 9巻 34頁 | 244頁11行目 | 1458頁 9行目 |    |
| 386 | 竹河 | 3丁オ  | 4行目  | 9巻 43頁 | 250頁 2行目 | 1463頁13行目 |    |
| 387 | 竹河 | 4丁オ  | 12行目 | 9巻 45頁 | 252頁 6行目 | 1465頁 2行目 |    |
| 388 | 竹河 | 5丁オ  | 5行目  | 9巻 47頁 | 253頁 4行目 | 1465頁10行目 |    |
| 389 | 竹河 | 8丁ウ  | 3行目  | 9巻 54頁 | 257頁 3行目 | 1468頁11行目 |    |
| 390 | 竹河 | 17丁ウ | 7行目  | 9巻 72頁 | 268頁 5行目 | 1476頁14行目 |    |
| 391 | 竹河 | 20丁ウ | 10行目 | 9巻 78頁 | 272頁 8行目 | 1479頁12行目 |    |
| 392 | 竹河 | 21丁オ | 11行目 | 9巻 79頁 | 273頁 4行目 | 1480頁 4行目 |    |
| 393 | 竹河 | 25丁オ | 2行目  | 9巻 87頁 | 277頁12行目 | 1483頁 9行目 |    |
| 394 | 竹河 | 29丁ウ | 8行目  | 9巻 96頁 | 284頁 3行目 | 1487頁12行目 |    |
| 395 | 竹河 | 30丁オ | 6行目  | 9巻 97頁 | 284頁 8行目 | 1488頁 3行目 |    |
| 396 | 竹河 | 30丁オ | 8行目  | 9巻 97頁 | 284頁 9行目 | 1488頁 4行目 |    |
| 397 | 竹河 | 36丁ウ | 10行目 | 9巻110頁 | 293頁 2行目 | 1494頁 2行目 |    |
| 398 | 竹河 | 39丁ウ | 4行目  | 9巻116頁 | 296頁 1行目 | 1496頁 5行目 |    |
| 399 | 竹河 | 39丁ウ | 7行目  | 9巻116頁 | 296頁 2行目 | 1496頁 6行目 |    |
| 400 | 竹河 | 41丁ウ | 3行目  | 9巻120頁 | 298頁 1行目 | 1497頁13行目 |    |
| 401 | 竹河 | 42丁ウ | 5行目  | 9巻122頁 | 299頁 4行目 | 1498頁11行目 |    |
| 402 | 竹河 | 43丁ウ | 5行目  | 9巻124頁 | 300頁 6行目 | 1499頁 9行目 |    |
| 403 | 橋姫 | 8丁ウ  | 8行目  | 9巻148頁 | 314頁11行目 | 1512頁12行目 |    |
| 404 | 橋姫 | 9丁オ  | 8行目  | 9巻149頁 | 315頁 6行目 | 1513頁 5行目 |    |
| 405 | 橋姫 | 11丁ウ | 2行目  | 9巻154頁 | 318頁 1行目 | 1515頁 5行目 |    |
| 406 | 橋姫 | 19丁オ | 2行目  | 9巻169頁 | 327頁 1行目 | 1521頁11行目 |    |

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成      | 増註       | 大成        | 備考 |
|-----|----|------|------|---------|----------|-----------|----|
| 407 | 橋姫 | 21丁オ | 3行目  | 9巻173頁  | 329頁 5行目 | 1523頁 9行目 |    |
| 408 | 橋姫 | 24丁オ | 5行目  | 9巻179頁  | 333頁 3行目 | 1526頁 1行目 |    |
| 409 | 橋姫 | 32丁オ | 11行目 | 9巻195頁  | 342頁 8行目 | 1532頁11行目 |    |
| 410 | 橋姫 | 32丁ウ | 5行目  | 9巻196頁  | 342頁11行目 | 1532頁14行目 |    |
| 411 | 橋姫 | 33丁オ | 2行目  | 9巻197頁  | 343頁 4行目 | 1533頁 4行目 |    |
| 412 | 橋姫 | 37丁オ | 7行目  | 9巻205頁  | 347頁12行目 | 1536頁14行目 |    |
| 413 | 橋姫 | 41丁オ | 1行目  | 9巻213頁  | 351頁12行目 | 1540頁 3行目 |    |
| 414 | 椎本 | 8丁オ  | 9行目  | 9巻237頁  | 365頁 5行目 | 1552頁 2行目 |    |
| 415 | 椎本 | 9丁オ  | 3行目  | 9巻239頁  | 366頁 3行目 | 1552頁 9行目 |    |
| 416 | 椎本 | 10丁ウ | 7行目  | 9巻242頁  | 368頁 4行目 | 1554頁 1行目 |    |
| 417 | 椎本 | 14丁オ | 12行目 | 9巻249頁  | 372頁 8行目 | 1556頁14行目 |    |
| 418 | 椎本 | 15丁オ | 11行目 | 9巻251頁  | 373頁10行目 | 1557頁12行目 |    |
| 419 | 椎本 | 25丁ウ | 1行目  | 9巻272頁  | 385頁 3行目 | 1566頁 4行目 |    |
| 420 | 総角 | 4丁ウ  | 7行目  | 9巻322頁  | 413頁 5行目 | 1589頁 2行目 |    |
| 421 | 総角 | 10丁オ | 3行目  | 9巻333頁  | 419頁 8行目 | 1593頁11行目 |    |
| 422 | 総角 | 12丁オ | 11行目 | 9巻337頁  | 422頁 4行目 | 1595頁12行目 |    |
| 423 | 総角 | 23丁オ | 4行目  | 9巻359頁  | 434頁 8行目 | 1604頁13行目 |    |
| 424 | 総角 | 34丁ウ | 2行目  | 9巻382頁  | 448頁 5行目 | 1614頁 7行目 |    |
| 425 | 総角 | 37丁オ | 6行目  | 9巻387頁  | 451頁 8行目 | 1616頁12行目 |    |
| 426 | 総角 | 49丁ウ | 6行目  | 9巻412頁  | 466頁10行目 | 1628頁 2行目 |    |
| 427 | 総角 | 56丁オ | 7行目  | 9巻425頁  | 474頁 8行目 | 1633頁13行目 |    |
| 428 | 総角 | 65丁オ | 3行目  | 9巻443頁  | 485頁12行目 | 1641頁14行目 |    |
| 429 | 総角 | 67丁オ | 6行目  | 9巻447頁  | 488頁 6行目 | 1643頁14行目 |    |
| 430 | 総角 | 68丁ウ | 2行目  | 9巻450頁  | 490頁 1行目 | 1645頁 3行目 |    |
| 431 | 総角 | 68丁ウ | 7行目  | 9巻450頁  | 490頁 5行目 | 1645頁 5行目 |    |
| 432 | 総角 | 71丁ウ | 1行目  | 9巻456頁  | 493頁 8行目 | 1647頁13行目 |    |
| 433 | 総角 | 85丁ウ | 3行目  | 9巻484頁  | 510頁 6行目 | 1660頁14行目 |    |
| 434 | 総角 | 86丁オ | 4行目  | 9巻485頁  | 511頁 2行目 | 1661頁 7行目 |    |
| 435 | 総角 | 86丁ウ | 3行目  | 9巻486頁  | 511頁 8行目 | 1661頁13行目 |    |
| 436 | 早蕨 | 16丁オ | 8行目  | 10巻 35頁 | 545頁 1行目 | 1690頁 3行目 |    |
| 437 | 宿木 | 2丁オ  | 1行目  | 10巻 53頁 | 553頁 1行目 | 1701頁 1行目 |    |
| 438 | 宿木 | 6丁オ  | 12行目 | 10巻 61頁 | 558頁 3行目 | 1705頁 1行目 |    |
| 439 | 宿木 | 8丁ウ  | 10行目 | 10巻 66頁 | 561頁 6行目 | 1707頁 3行目 |    |



| 項番  | 巻名 | 湖月抄  | 開始行  | 集成      | 増註       | 大成        | 備考     |
|-----|----|------|------|---------|----------|-----------|--------|
| 440 | 宿木 | 10丁ウ | 6行目  | 10巻 70頁 | 563頁 6行目 | 1708頁10行目 |        |
| 441 | 宿木 | 23丁オ | 9行目  | 10巻 95頁 | 578頁 8行目 | 1719頁11行目 |        |
| 442 | 宿木 | 40丁オ | 7行目  | 10巻129頁 | 599頁12行目 | 1735頁 6行目 |        |
| 443 | 宿木 | 42丁オ | 10行目 | 10巻133頁 | 602頁 7行目 | 1737頁 6行目 |        |
| 444 | 宿木 | 43丁ウ | 7行目  | 10巻136頁 | 604頁 5行目 | 1738頁10行目 |        |
| 445 | 宿木 | 47丁ウ | 4行目  | 10巻144頁 | 609頁 5行目 | 1742頁 6行目 |        |
| 446 | 宿木 | 61丁ウ | 7行目  | 10巻172頁 | 626頁 6行目 | 1754頁13行目 |        |
| 447 | 宿木 | 95丁ウ | 7行目  | 10巻240頁 | 668頁 5行目 | 1784頁11行目 |        |
| 448 | 東屋 | 2丁オ  | 3行目  | 10巻255頁 | 676頁 2行目 | 1793頁 2行目 |        |
| 449 | 東屋 | 12丁オ | 2行目  | 10巻275頁 | 687頁12行目 | 1802頁 2行目 |        |
| 450 | 東屋 | 36丁ウ | 4行目  | 10巻324頁 | 717頁 8行目 | 1824頁 3行目 |        |
| 451 | 東屋 | 38丁オ | 7行目  | 10巻327頁 | 719頁 7行目 | 1825頁10行目 |        |
| 452 | 東屋 | 41丁オ | 4行目  | 10巻333頁 | 723頁 1行目 | 1828頁 4行目 | 453と転倒 |
| 453 | 東屋 | 39丁ウ | 7行目  | 10巻330頁 | 721頁 5行目 | 1827頁 1行目 | 452と転倒 |
| 454 | 東屋 | 54丁オ | 5行目  | 10巻359頁 | 738頁10行目 | 1839頁12行目 |        |
| 455 | 東屋 | 63丁ウ | 12行目 | 10巻378頁 | 750頁12行目 | 1848頁11行目 |        |
| 456 | 浮舟 | 4丁オ  | 6行目  | 11巻 11頁 | 760頁 4行目 | 1860頁13行目 |        |
| 457 | 浮舟 | 12丁オ | 12行目 | 11巻 27頁 | 770頁 9行目 | 1868頁 8行目 |        |
| 458 | 浮舟 | 17丁オ | 5行目  | 11巻 37頁 | 776頁 5行目 | 1872頁12行目 |        |
| 459 | 浮舟 | 18丁オ | 3行目  | 11巻 39頁 | 777頁 5行目 | 1873頁 9行目 |        |
| 460 | 浮舟 | 19丁オ | 4行目  | 11巻 41頁 | 778頁 9行目 | 1874頁 9行目 |        |
| 461 | 浮舟 | 19丁オ | 6行目  | 11巻 41頁 | 778頁10行目 | 1874頁11行目 |        |
| 462 | 浮舟 | 19丁ウ | 11行目 | 11巻 42頁 | 779頁 9行目 | 1875頁 6行目 |        |
| 463 | 浮舟 | 22丁オ | 5行目  | 11巻 47頁 | 782頁 5行目 | 1877頁 8行目 |        |
| 464 | 浮舟 | 23丁オ | 9行目  | 11巻 49頁 | 783頁 9行目 | 1878頁 9行目 |        |
| 465 | 浮舟 | 23丁ウ | 2行目  | 11巻 50頁 | 783頁12行目 | 1878頁11行目 |        |
| 466 | 浮舟 | 25丁オ | 6行目  | 11巻 53頁 | 786頁 3行目 | 1880頁 6行目 |        |
| 467 | 浮舟 | 34丁オ | 7行目  | 11巻 71頁 | 798頁 1行目 | 1889頁 1行目 |        |
| 468 | 浮舟 | 35丁ウ | 10行目 | 11巻 74頁 | 799頁12行目 | 1890頁 9行目 |        |
| 469 | 浮舟 | 36丁オ | 6行目  | 11巻 75頁 | 800頁 5行目 | 1890頁14行目 |        |
| 470 | 浮舟 | 42丁オ | 9行目  | 11巻 87頁 | 808頁 5行目 | 1896頁13行目 |        |
| 471 | 浮舟 | 43丁オ | 1行目  | 11巻 89頁 | 809頁 4行目 | 1897頁 8行目 |        |
| 472 | 浮舟 | 52丁オ | 5行目  | 11巻107頁 | 821頁 6行目 | 1906頁 2行目 |        |

北村季吟の源氏学（三）（宮川）

| 項番  | 巻名  | 湖月抄  | 開始行  | 集成      | 増註        | 大成        | 備考 |
|-----|-----|------|------|---------|-----------|-----------|----|
| 473 | 浮舟  | 53丁オ | 6行目  | 11巻109頁 | 822頁 9行目  | 1907頁 2行目 |    |
| 474 | 浮舟  | 56丁ウ | 7行目  | 11巻116頁 | 827頁 1行目  | 1910頁 6行目 |    |
| 475 | 浮舟  | 68丁オ | 7行目  | 11巻139頁 | 841頁 2行目  | 1921頁 1行目 |    |
| 476 | 蜻蛉  | 36丁オ | 8行目  | 11巻225頁 | 892頁 4行目  | 1963頁 1行目 |    |
| 477 | 蜻蛉  | 38丁オ | 12行目 | 11巻229頁 | 895頁 8行目  | 1964頁12行目 |    |
| 478 | 蜻蛉  | 39丁オ | 11行目 | 11巻231頁 | 896頁10行目  | 1965頁11行目 |    |
| 479 | 蜻蛉  | 46丁ウ | 11行目 | 11巻246頁 | 905頁 8行目  | 1972頁 9行目 |    |
| 480 | 蜻蛉  | 58丁ウ | 3行目  | 11巻270頁 | 920頁 9行目  | 1982頁13行目 |    |
| 481 | 蜻蛉  | 59丁オ | 3行目  | 11巻271頁 | 921頁 4行目  | 1983頁 5行目 |    |
| 482 | 手習  | 15丁オ | 3行目  | 11巻307頁 | 941頁 5行目  | 2000頁 9行目 |    |
| 483 | 手習  | 29丁オ | 2行目  | 11巻335頁 | 957頁11行目  | 2012頁12行目 |    |
| 484 | 手習  | 31丁オ | 6行目  | 11巻339頁 | 960頁10行目  | 2014頁11行目 |    |
| 485 | 手習  | 32丁オ | 1行目  | 11巻341頁 | 961頁 8行目  | 2015頁 6行目 |    |
| 486 | 手習  | 49丁オ | 12行目 | 11巻375頁 | 983頁 2行目  | 2030頁12行目 |    |
| 487 | 手習  | 65丁ウ | 11行目 | 11巻408頁 | 1004頁 2行目 | 2045頁 6行目 |    |
| 488 | 手習  | 68丁オ | 8行目  | 11巻413頁 | 1007頁 1行目 | 2047頁 7行目 |    |
| 489 | 手習  | 70丁ウ | 2行目  | 11巻418頁 | 1009頁 8行目 | 2049頁 7行目 |    |
| 490 | 手習  | 70丁ウ | 7行目  | 11巻418頁 | 1010頁 4行目 | 2049頁10行目 |    |
| 491 | 手習  | 70丁ウ | 10行目 | 11巻418頁 | 1010頁 5行目 | 2049頁11行目 |    |
| 492 | 夢浮橋 | 1丁オ  |      | 11巻425頁 | 1013頁     |           |    |
| 493 | 夢浮橋 | 20丁ウ | 9行目  | 11巻464頁 | 1037頁 6行目 | 2070頁12行目 |    |